

70

288

中華民國十年拾月編

大和田建樹著

明治文學史

東京博文館藏版

大和田建樹著

明治文學史
全

東京 博文館藏版



明治文學史目次

- (一) 總論……………一
- (二) 第一期……………謂はゆる輸入時代
 - 其一 福澤學風……………一〇
 - 其二 敬宇先生……………二四
 - 其三 翻譯書の流行……………二八
 - 其四 英語學……………三三
 - 其五 新聞の創業……………三八
 - 其六 雜誌の刊行……………七一
 - 其七 守舊學派……………七三
 - 其八 結論……………七八
- (三) 第二期……………謂はゆる反動時代

其一 総論……………八〇

其二 小説界の繁昌……………八七

其三 戯曲脚本……………一七三

其四 新体詩唱歌……………一八四

其五 雑誌及著書……………一九二

其六 結論……………一九九

(四) 第三期……………謂はゆる新聞時代

概論……………二〇一

明治文學史目次終

明治文學史

大和田建樹 著

(一) 總論

正小判の直打を知れどもドルの相場を知らざるもの
 も、平壤の戦況にも疎きものが却て漢楚軍談を踏んじて
 其の多きこそ奇態なれ。是れ他なし古を重んじて今を
 蔑するもの。其の教育法が餘弊を今日に遺したるにて、かの新聞雜
 報を以て和文漢文の古書を先にするが如き、手紙一本書を
 得ば兒童に徒然草土佐日記の講釋を始むるが如き、我文學界に
 於ても往々見るところ。豈之を普通教育の宜しきを得たるもの
 として國民文學の粹に叶ひたるものとして稱譽するを得べし



明治の文學
とは何ぞ

んや、余は唯骨董家の古佛像に於けるが如きものと一般に看過せんと欲するなり。
然らば明治の文學とは何をか謂ふ。右の徒然草土佐日記伊勢物語源氏物語の再興を謂ふにも非ず。國學漢學詩歌連俳の流行を意味するにも非ず。謂はゆる明治社會の進歩と共に活動して止まざる新文學の存するものあるを謂ふなり。余は今此新文學の發達消長を探つて見んとす。亦おもしろからぬ事にもあらざるべし。

國事と文學
との關係

およそ國の東西を問はず時の古今を論せず。國事の繁簡と文學の消長とは其關係を密にし。文學の運命常に社會の盛衰に伴ひ。れて進退するは疑ふべからざる事實なり。されば文學の盛なるは必ず國事多端の時に在らずして其大なる出來事の後に於てするを常とす。試に見よ羅馬の文學は戰爭時代に興らざして

維新と西南
戰爭

泰平の後に盛なりしに非ずや。又英國史中に文學の最盛時と稱せらるゝエリザベス時代は、毫も政事上に見るべき出來事なくして山と山とに挟まれたる谷間の如く。國事多端の日を過去と未來にながめわたしたる時なりしならずや。今日の英國かならずしも世界を轟かさず。然れども政事商業を以て天下に雄飛するは、亦文學と國事との隆盛を並行せしめずして、寧ろ反對の關係に於てあるを見るべきなり。

三時代

我國近世の出來事として其外形に顯はれたるもの、最大なるは維新と西南戰爭なるべし。日清事件は暫く措く。然れども更に社會進化を主眼にして考ふれば、維新後三時代の變遷あることを知る。即ち明治維新以來の西洋文明輸入時代、西南戰爭以來の輸入文明反動時代、二十三年後の立憲政治發達時代、これなり。之に伴なつて西洋學の消長は我國の文學に影響すること頗る

西洋學の影

英學の隆盛

大なるが中にも英學は殊に民間より發達して其基礎を我國一般の社會に取りしが故に其消長の相關するところ最も多し明治二三年の頃より之を學ぶもの漸く増加し來り十四五年に至つて著るしく隆盛を極めしが十九年に森文部大臣の小學校に英語科を必ず置くべきことを令せしより獨り外形上のみならず恐らくは精神上にも英國風を取るの傾を爲し謂はゆる實用英學なるもの盛に行はれ従つて諸學校に用ひらるゝ教科書も大に其程度を進めたり其以前には例へばマコーレーのヘースチングスとかクライヴ若くはジジソンのラセラスの類を読み得れば一廉の英學者として尊敬せられしものが此頃よりはシェイクスピア、ミルトン、スペンサーを繕き、ドラマを『雲耶山耶』に代へて口ずさむに至れり此に於て反動時代に息ふさかへし、漢學が再び若葉の霜に遇ひたる如く萎靡して振はざる有様と爲

小説起る

りたるは讀者の記憶にも猶残り居る事ならん英學の影響は當これらの發生と壓倒とのみに止まらずして進むところは向ふに敵なく殊に歴史に哲學に小説に於て其版圖を擴め骨を英にして衣を和にするが如きもの著述に新聞に續々現出するを見るに至れるは實に盛なりといふべし而して其最たるものは小説なりき

此に於て謂はゆる硯友社一派の新体小説家起る其連中は槩ね皆英學を修め英國小説家を氣取る人々なりしかば此硯友社の起れるは實に我國の小説界むしろ文學界に著るしき影響を與へたるものと謂はざるべからず何となれば其結果は種々の點に於て顯はれたればなり其最も著るしきは小説の性質上英國風の精神を傳播したる事にして之に反對せしむるが爲めに在來の日本風小説家を呼び起したるの結果を生じ従つて數多の

小説結社の如きものを世上に組織せしむるに至り、小説界すこぶる賑はしく景氣つきたるは二十一年の事なりき。曰く寫實的、曰く勸懲的、曰く悲哀的、曰く滑稽的、曰く家庭的、曰く何、曰く何と種々様々の名稱を附して、おのゝ其派の模範小説を出だしたるも此時代に在りしなり。余は斷じて曰はんとす。維新後の文學が小説の形に於て最も世人の眼を惹きたるは實に此時を以て頂上とすと。

憲法發布以來

憲法一たび發布せられてより、政界や、繁榮を加へ、殊に第一議會開會後は大小の政事問題堆積して山の如く、殊に在野政黨の政權競争はげしきを以て、文學界は前に述べたる原則に従ひ、小説といひ詩文といひ一般社會の注目を稍や怠らしむる事と爲り、否、むしろ社會の耳目外に置かるゝに至れり。是より先硯友社既に解け、假名の會、羅馬字會、言文一致會を始として國語國文に

小説の衰運

關する研究會の如き、一時世人の耳目を聳動したりし結社會合も十中の七八まで解散して、文學界は俄に秋風落日の觀を呈し來る。讀者諸君は果して如何なる感をか爲す。れよそ社會の有様を觀、現在の狀態を最も能く明かに告ぐるものは新聞紙に如くは無し。されば新聞紙上に於て文學が如何に待遇せられしかを見る時、余が上に述べたる判斷の甚しく不當ならざるを知らん。始め硯友社以下小説家の著るしく世上に歡迎せられし頃、在つては巨額の俸酬と懇懃ある請願とを以て新聞社は僅に謂はゆる大家の寄稿を得たりしが、漸く新聞紙の讀者が其議會傍聽筆記に重きを置くに至り、爲めに『日本』の賣高を著るしく増したりし時代には、二三の小説家は都下に雇主を見出だす能はずして、地方新聞社に出稼するに至りしが、如き以て明かに文運の下り坂に向へるを證するに足るべし。蓋し文

當時社會の眞相

學は社會を飾るものなり。殊に小説は人民の裝飾品むしる贅澤品の一なり。人民衣食に忙はしく未だ恒産あらざる社會に於ては之を賓客として待遇する能はざるが故に。彼また燦爛たる光を放つ能はざるは怪しむに足らず。顧みも我當時の社會が如何なる位置に在るかを観る時は。小説以下文學上生産の甚だ整はざるこそ自然の勢なる事を發見すべし。實に當時の社會の創造の社會あり。また恒産貯蓄なきの社會なり。而して小説家文學家として立つと。その人も亦多くは糊口のために小説を稿し。生活のために筆を執るものなり。如何なる餘裕を以てか大作名著に従事するを得んか。ある生存競争の最も盛んなる今日にありて。文學上の大産物あらんことを希望するは寧ろ無理と謂はざるを得ざるなり。

然れども是は社會一般の原則のみ。文學界普通の常理のみ。英雄

文界英雄の出てきたるは何ぞ

は常理に拘はらずして寧ろ反つて時勢を作ると聞く。文學界の英雄豈獨り之なからんや。沙翁一たび出で、英國は文學の名を五洲に擧げ、馬琴の書傳りて日本の文學また歐米各國を凌駕せん。とす。今此文學の微弱なる時に當つて馬琴沙翁の如き英雄の出でんこと。吾人の希望して止まざる處なるに。未だ今日までも希望の一部分をだに満たす能はざるの感あるは何故ぞや。是れ畢竟我國の事物すべて創造の代にありて。西洋文明の模擬に忙ししく。未だ謂はゆるオリジナリチの精神發達せざるに主として原因せずんば。あらず。聞く歐米諸國に於ては文學の社會より優待せらるること著るしく。殊に其著作の秀逸なるものは上流交際社會にもてはやさるること甚し。我國の今日に在つては未だ此くの如き事あるを見ず。ひとり小説のみ稍や一般人民の耳目に觸れつゝ。寵辱を異にすといへども。其消長變遷は

前に述ぶるが如く、特に是はといふ發達を認めざることを遺憾なれ。嗚呼小説の沿革は實に文學一般の消長と關係すること密にして且つ大なり。況んや明治社會の新産物として他に認め得べきの著作甚だ寥々たるをや。今此書中に於て殊に重みを小説よ置くものは是等の理由に因るのみ。

(二) 第一期……謂はゆる輸入時代

其一 福澤學風

我國維新後の社會に最も著るしき影響を與へたるものは、讀者も知らん英獨風の二主義なるを而して英國主義すなはち英國風の學問は民間より弘まれること既に總論に於て余は之を言へり。すべて民間より起れるものは其下底廣く且つ堅きが故に、從つて發達また普く且つ速なるは理の見易きところ。之に反し

英國主義と
獨國主義と

英學の勢力

て獨乙主義は政府より先づ行はれしかば、たとへば貴顯高官の人々が獨塊諸國を漫遊して、其碩學鴻儒の談話を聞き、又其制度文物の完備せるを見、歸朝の後これを行政財政文學軍事および其他に應用せしもの類是なり。其區域の狭くして行はるゝところ從つて普からざりしは、實際に就いて之を確むるを得べし。されば彼の民間よりせしものこそ世人を感化せしむるの速力最も強大にして、我社會の方針を左右する原動力の一と爲りしは争ふべからざるの事實なりとす。而して此くの如く、英學をして著るしき勢力を社會上に有せしむるに至りし其原動者は實に『三田の親玉』と呼ばれし

福澤氏

福澤諭吉

氏なりと謂ひざるを得ず。氏の來歴と性行とに就きて、別に言はず。其謂はゆる西洋主義を最も早く我維新後の社會に輸入し

一たる事は何人も認むるところなるべし。およそ社會の革命は其後の社會をして全く綱紀を弛めしむるが故に、諸般制度の破るゝと共に、謂はゆる社會制裁なるものは悉く地を拂つて去り、新奇なるものとしいへば人争うて之を取り入れんとするを常とす。福澤氏の西洋世義に輸入し始めしは實に此くの如き時代なりしなり。王政維新を以て我國固有の風俗習慣概ね打破せられし後に當り、西洋主義をして容易に代つて位置を取らしむるに至りしは固より時勢の然らしむる處とはいへ、時勢を未來に豫知して之に乗ずるの卒先者あるに非ざりせば、文明進歩の遲速いまだ知るべからざるなり。

福澤氏曰く、

世帯ノ要ハ事物ノ順序ニ注意シテ前後ヲ勘辨スルニ在リ
夕方ノ食事ヲ朝ヨリ用意シ明日入用ノ品ヲ今日ニ買ヒ冬

ノ衣服ヲ秋ニ洗ヒ秋ノ暴風ヲ夏ニ防グハ固ヨリ論ヲ俟タズ都テ家内ノ品物ノ置場所ヲ定メテ其多少有無ヲ諸記セザル可ラズ衣裳ハ簞子ニ在テ夜具ハ長持ニ在ルヤ下駄ニ餘リアリテ傘ニ不足ハナキヤ蠟燭ノ安物ハ多ク買込タレテ提燈ノ張替ハ忘却セザルヤ用簞子ノ底ニ不用ノ反故ハナキヤ押入ノ隅ニ風呂敷ノ潜伏スルモノハナキヤ尙甚シキハ半切ノ紙ヲ接ガズシテ手紙ヲ書キ接ギタル巻紙ヲ裂テ鼻紙ニ用ル者モアラン事物ニ順序アリト云フ可ラズ又曰く、

學校ニ石盤ヲ用ヒテ數學ニハ明ナレテ店先キノ帳合ニハ暗ク、作文誦誦ハ上手ナレテ手紙ノ文句ハ出來ズ、窮理書ハ讀タレテ竈ノ築キ様ト流シノ水ハキニハ工風ヲ用ユルヲ知ラズ、化學ノ吟味ハ經タレテ甘酒ノ作り様ト豆腐ノ製法

ハ未ダ之ヲ聞カズ或ハ十三三ノ娘ノ子ガ西洋流ノ學校ニ
入り又ハ西洋人ノ手ニ附キ西洋音ノ唄ヲ習ヒ西洋風ノメ
リヤスヲ組ミ却テ糠袋ノ縫ヒ様モ知ラズ或ハ和漢洋ノ書
ヲ讀テ三十一字モ少シハ出來レモ人身窮理ハ忘却シテ自
分ノ體ノ骨モ知ラズ風ヲ引テ容體ヲ述ルコトモ知ラズナゾ
其不都合ハ今日既ニ世上ノ親達ノ覺ル所ナリ

又曰く

世ノ論者が動モスレバ天理人道ト云フコトヲ唱へ此ハ天理
ニ基ツクト云ヒ彼ハ人道ニ戻ルト云ヒ一定不變万古動カ
ス可ラザル者ノヤウニシテ議論ヲ立ル者多ケレモ其實ハ
タフイモナキコトナリ忠臣二君ニ仕へ甲州武士ガ徳川其他
ニ仕へテ働タルモ亦天理人道ニ戻タルニ非ズ年若キ寡婦
ガ剃髮シテ尼寺ニ入り亡夫ノ菩提ヲ吊フモ天理人道ナリ

再緣シテ子ヲ生ンデヨク其子ヲ教育スルモ天理人道ナリ
今ノ世ニ兄弟姉妹ガ夫婦ダラバ天理人道ニ戻ルナラント
雖モ「アダム」「イヴ」ノ子供ハ誰ト緣組シタルヤ又日本書紀
ニ仁徳天皇三十八年春正月八田ノ皇女ヲ皇后ト爲ストア
リ皇女ハ天皇ノ妹ナリ今ヨリ之ヲ思へバ不審ナレモ其時
代ニハ矢張リ天理人道ニ基キシコトナリ
往古ノ事ハ差置キ今日ニ於テモ世界各國ニ天理人道ノ殊
ナルモノアリ數年ノ間ニ天理人道ノ變化シタルモノアリ
支那日本ノ家族ニテ主人ノ威張ルハ支那日本ノ天理人道
ナリ西洋諸國ニテ細君ノ跋扈スルハ西洋諸國ノ天理人道
ナリ數年以前封建ノ時代ニ大名ノ家來ガ主君ノ爲ニ命ヲ
致スモ天理人道ナリ今日ニ至リ其主君ヲ同輩ノ如クスル
モ亦天理人道ナリ赤穂ノ義士ガ敵ヲ討タルハ元祿年間ノ

天理人常ナリ明治年間ニ之ヲ駁スルハ明治年間ノ天理人
道ナリ火葬ノ法ハ數百年來天理人道ニ基ク事ナリシガ暫
時天理人道ニ戻ルコト爲リ又近日ハ天理人道ニ基クコトニ
復シタルモ數年ノ後ハ復タ天理人道ニ戻ルベキヤモ圖ル
可ラズ右ノ如ク天理人道ハ古今ニ殊ナリ國々ニ殊ナリ人
ノ地位ニ由テ殊ナリ數年ノ經過ニ由テ殊ナリ殆ド其在ル
所ヲ求メテ之ヲ見ル可ラズ

以て其執る所の一斑を見るべし。福澤氏は實に英學主義を紹介
すると共に新空氣を導き入れて舊天地を一洗し、實利的平民的
を主張して打破、地下に一生面を開き、究屈迂遠なる和文漢文の
臭味を嫌ひて平易通俗なる文体を起さんと力めたり。而して其
論の珍奇に過ぎ極端に走りしが爲め、或は無數の反對論者を喚
起し、一時は世に嫌忌せられし姿なきにしも非ざりしと雖も、天

其著書

の大勢の遂に氏を助けて全勝を得せしめ、昨日の敵は今日の味
方と爲りて、全國一致を以て其新主義を歓迎し、其新學風を崇拜
する者さへ日よ月に多さを加ふるに、至れり。請ふこゝに其著書
の主たるものゝ名を擧げしめよ。

學問の勸め

文字の教

西洋事情

世界國盡

窮理圖解

童蒙教草

其讀者をして如何に舊思想を離れて新思想に向はしめしか。如
何に四書五經的の四角なる文体を脱して御座候流の平易なる
語氣に趣かしめしかは、右の著書に就きて知るを得ん。猶くたく

文字の教

だしくとも忍んで左に抜摘せる數章を讀め。

『文字の教の』端書に曰く(明治六年八月)

時節ヲ待ツトテ唯手ヲ空フシテ待ツ可キニモ非ザレバ今
 ヨリ次第ニ漢字ヲ廢スルノ用意專一ナル可シ其用意トハ
 文章ヲ書クニムツカシキ漢字ヲバ成ル丈ケ用ヒザルセウ
 心掛ルコナリ。ムツカシキ字ヲサヘ用ヒザレバ漢字ノ數ハ
 二千カ三千ニテ澤山ナルベシ此書三冊ニ漢字ヲ用ヒケル
 言葉ノ數僅ニ千ニ足ラザレモ一ト通リノ用便ニハ差支ナ
 シコレニ由テ考レバ漢字ヲ交ヘ用ルトテ左マデ學者ノ骨
 折ニモアラス唯古ノ儒者流儀ニ倣テ妄ニ難キ字ヲ用ヒザ
 ルヤウ心掛ルコ緊要ナルノミ故サラニ難文ヲ好ミ其稽古
 ノタメトテ漢籍ノ素讀ナドヲ以テ子供ヲ窘ルハ無益ノ戯
 ト云テ可ナリ

又其本文に曰く(都合不都合の文字の用例を示さんとて)

梯子ヲ荷フテ旅行スルハ不都合ナリ○婚禮ノ席ニテ泣キ
 吊ニ行テ笑フハ不都合ナリ○臺所ノ前ニ井戸アルハ世帯
 ノタメニ都合宜シ○身ノ丈高キ男ハ棚ノ物ヲ取ルニ都合
 宜シト雖モ人ノ衣服ヲ借リテ着ルニハ不都合ナリ○虚言
 モ始ハ都合宜シキニ似タレモ後ニハ必スコレニ由テ不都
 合ヲ生ス可シ

從來の文章は概ね漢文的ならざれば書簡体なりしに此兩極端
 を折衷和合して一の新体平民的文章を教へたる氏の方は實
 に我維新後の文學上に一大指南車と爲りたるは疑ふべからず
 請ふ見よ今日の新聞に雜誌に堂々たる論文の間にさへ『不都合』
 『迷惑』等の文字を用ひて誰も怪しむものあらざるを而して是
 等の文字は維新の初年頃まで獨り書簡文にのみ用ひられ來り

しものなるを知らば、福澤氏が今日の文學界に遺したる功績豈著大なりと謂はざるを得んや。況んや此漢字排撃説は遂に後日の『假名の會』を喚起し、『假名の會』は遂に國語國文の隆盛を誘導せしものなりとすれば、我輩明治の文筆に従事するもの、實に謝すべき處を知らざるなり。

世界國盡

『世界國盡』は萬國地理を教へしものなるが、其文に曰く、

世界は廣し萬國は多しといへど、おほよそ五つに分けし名目は、亞細亞、阿非利加、歐羅巴、北と南の亞米利加に、境限りて五大洲、大洋洲、別に又南の島の稱へなり。土地の風俗、人情も、處かはれば品かはる。其様々を知らざるは、人の人たる甲斐もなし。

遺恨に、遺恨かさなりて頼むところは、天地の理、頃は安永五

年の秋、十三州の名代人、四十八士の連判狀、世界へ示す檄文に、英吉利王の罪を責め、自から建てし合衆國、武器兵糧も乏しき民、數萬の敵は海を越え、新手引きかへ攻め來る。猛虎飛龍の勢に、おそれ撓まぬ鉄石の心に、誓ふ國のため、失ふ命得る自由、正理屈して生さんより、國に報ゆる死を取らん。一死決して七年の長、月の日の攻め守り、智勇義の名を千歳に流す血の河骨の山、七十二戰の艱難も、消えて忘るゝ大勝利。目出度こゝに英吉利と和睦結びし新條約。

世界の地理と歴史とは平易流暢の日本文字もて書かれたり。趣味ある馬琴調の七五体は、新輸入の事實を記すに用ひられたり。兒童豈喜んで之を口に誦し、節を附けて吟せざるを得んや。此書一たび出で、より到るところの學校に往來に、『世界はアひろオしばアんこオくは』と歌ふ聲を聞くに至りしなり。是れ彼の殺伐

なる詩吟の口調を變じて。未來の唱歌軍歌を喚起するの伏線と爲りしものと謂はんも敢て誣言にはあらざるべし。何ぞ現今行はるゝところの『かまくらアだんじあり』あどゝいふ口調の甚しく相類似せるや。作者或は知らずといへども『世界は廣し』調の暗々裡に維新後の人氣を感化せし結果の多少腦裡に染み着き居るものと謂はしむることは。讀者或は余に之を許すべしと信するなり。

童蒙教草

童蒙教草に曰く。(英人チャンブル氏著モラル。カラス。ブックの翻譯)

世の中にかえるで、いひしはいもむしなどいふ虫あり罪もなきものなるに心なき人は見付次第にこれを苦しめてを殺すことおれども以ての外の事なり假令い如何なる虫にても無益にこれを痛むは宜しからず且又小さき動物をむくするよりして追々これに慣れ我同類の人を扱ふ

にも慈悲の心を失ひ遂には大惡無道の働を爲すに至るべし故に入若し不圖したる出來心にて斯る虫を殺さんとすることあらば則ち我身に立返り若し我身体より數倍大ひなる怪物ありて我を苦しむること今我この虫を扱ふが如くならば其苦痛如何ばかりならんと身に引替て虫のいたさを思ひ知るべし

翻譯文章の好模範を與へしのみならず亦後日の修身書に小學讀本雜誌に新聞に苟くも兒童を教訓する的文章に用ひらるゝ語氣は此時に誘導せられしを知るべし是等の理由によりて如何でか我明治文學史の初に於て福澤論吉氏を大書特筆せざる可けんや。

慶應義塾

氏は是より先き英學校を創立し名づけて慶應義塾といふ其執るところの主義は既に述べたる如く實利平民的なりしが故に

子弟の感化薰陶せらるゝこと特に著るしく其塾より出でたる人々が社會に雄飛するに當つては網紀既に弛み日に新奇を好むの世の中には非常の歡迎を受け政治上經濟上の意見は多く其塾出身の人々の支配する雜誌新聞著書のために左右せらるゝに至れり文學も亦此影響を免かるゝ事能はず世人をして『詩を作るより田を作れ』と言はしめしも此頃の事なりき従つて文學の平易になり平民的に爲りたるは前にしばし之を述べたり猶更に文學が理屈的に爲りたりと謂はんも亦不可なかるべし而して此理屈的に爲りゆきたる文學こそ明治社會の理屈的に爲りゆく寫眞とも見るを得べきなれ

東京を挾撃せし二學者

其二 敬宇先生

東京に二學者あり曰く三田の福澤曰く小石川の中村小石川の

中村とは同人社を建て西國立志篇を譯して有名なる

敬宇先生

これなり東京の兩端より西洋主義を以て紀律なき當時の紛雜社會を挾撃せしが福澤氏は其執るところ平民的なりしを以て廣く社會に影響を與へしは遙に中村氏に勝りしならん然れども中村氏も亦大に西洋主義を輸入して西洋道德主義を加味したる結果は明かに顯はれたり氏は漢學の力深かりしが爲め其

西國立志篇

の如き

西洋品行論

の如き實に英書翻譯の事業未だ盛ならざりし時にあたりて世人に利益を與へたる最も完全のものといふべし請ふ一章を引かん

立志篇の品行論

瓦德幼年ノ時戯玩ノ具ヲ作ルコトニ巧ナリケリソノ父ハ木
 工ニシテソノ舖ニ象限儀アリケルガコレニ因リテ生物體
 質ノ學或ハ生命ノニ心ヲ留メソノ深奥ニ達セリ又常ニ野
 外ニ徜徉獨歩シケルガコレヲ時トシテ草木ノ學ニ意ヲ用
 ヒタリ算術ノ器ヲ作りテ家業トナシケル時大風琴ヲ建ル
 コトヲ或人ヨリ托セラレタリケレバコレヨリ始メテ音韻ヲ
 調和スルコトヲ學ビ遂ニ善クコレヲ造レリ額拉斯哥ノ學堂
 ニ牛國民ノ作レル蒸氣機器ノ小キ様子ヲ藏シテアリシガ
 之レヲ修復スベシトテ瓦德ニ托セラレタリケレバ瓦德之
 レニ因リテ前人已ニ發明セル所ノ熱ノ作用及ビ蒸氣ノ漲
 開シ收縮スル所以ノ理ヲ講求シ又同時ニ機器建造ノ法ヲ
 研究シ困苦勉強久フシテ怠ラザリシガツヒニ縮密蒸氣機
 器ト云ヘルモノヲ造リ出セリ瓦德此ノ機器ヲ造リ出セル

マデ許多ノ星霜ヲ經タリソノ間成就スベキ望モ必シガタ
 クマタ朋友ノ德憑スルモノモ少カリシガ瓦德ハ更ニ工夫
 ヲ怠ラザリケリ然レモソレガ中ニ家人ヲ養フタメニ象限
 儀ヲ造リテ之レヲ賣リ絃弓管及ビ其他樂器ヲ作り汚水
 ノ工事ヲ測量シ道路ノ修造ヲ監視シ水道ノ築作ヲ掌理シ
 之レ等ノ事ヲ爲シ正經ノ利ヲ得テ生活ヲ營ミケリ久シフ
 シテ後一箇ノ良友馬寶爾敦ナルモノヲ得タリ亦タ工事
 ノ帥首タル俊傑ノ士ニシテ巧思アリ精カアリテ遠大ノ見
 識アル人ナリ瓦德ノ縮密機器ヲ用ヒテ人力ニ代ヘ諸般ノ
 工事ヲ爲ンコトヲ企テ遂ニ能ク志ヲ成シタリケリ

此書ノ譯し方に就いては人或は非難を試むるものありといへ
 ども今日に於ける英學ノ程度を以てしても猶之を最も完全な
 りといふを得べく其中に含まるゝ西洋道德主義が其書ノ小學

賞與品と爲り或は英文翻譯の參考書と爲りつゝ廣く我社會に傳播せられたる事、争ふ可からざる事實なりとす。

其三 翻譯書の流行

一たび福澤中村二氏著書世に行はれ學風社會を風靡せしより、一般人民の思想は著るしく西洋風に化し、一にも二にも模倣反譯を主として後れん事を懼れしかば、其弊は遂に『我』なる觀念を失ひ、又謂はゆるオリジナリチーの無き世の中と爲り來れり、而して京濱の鐵道、市中の電信、其他百般有形的の文明は之と伴うて一般の思想を謂はゆる開化的ならしむるに至りぬ。其結果として現はれ來りし當時の著書は概ね翻譯ならざれば、燒直し若くは直譯的の開化主義を紹介するものに過ぎざりき。其一二例を言ひ、歴史には、

著書の種類

萬國新史

泰西史鑑

の類、地理風俗には

輿地史略

西洋新書

西洋見聞錄

の類、修身教訓には

勸善訓蒙

西洋英傑傳

の類、經濟には

世渡の杖

銀行論

の類、政事には

第一期 翻譯書の流行

眞政大意

立憲政体畧

萬國公法

の類科學には

道理圖解

博物新編和譯

天變地異

人身究理

の類開化主義の紹介者としては

開化問答

文明開化

東京土産

の類枚舉に暇あらざりしが二十七年の今日を標準として言へ

ばこそ其説くところの程度いかにも幼稚にして笑ふに堪へ
がたき事もあれ當時に在りては書林店頭の上席を占め學校教
科書の重なる部分を領せしなり

思想の變化

今や彼の紀綱弛みはてたる社會に劇しく此の西洋主義の注入
せらるゝが爲めに世人の思想は日に従つて平民的に自由的に
權利義務的に趣きそれらの主義をして殆んど第二の天性ある
が如くに至らしめたりそも我邦人は常に法外なる事を好
み過劇なる事を喜ぶ性質なるが故に是まで人の思ひも寄らざ
りし新奇の思想は一たび侵入すると同時に雙手を舉げて歡迎
せらるゝに至る實に佛蘭西のルーソー氏が

民約篇

は此歡迎聲中に兆民中江篤介氏の手に依つて我社會に紹介せ
られしなりルーソー氏の原書「コントラソシアル」が如何に西洋

佛蘭西思想
入り来る

諸國に於て争うて讀まれ争うて翻譯せられしかは讀者之を知らん。佛蘭西流の思想は是よりして漸く我社會に注入せられんとす。而して當時の我社會の其是非善惡を判斷するに暇あらざりしなり。

余は又繰返して曰はん。維新後數年間の我社會は創造の時代なり。政事上繁忙極まるの時代なりと。實に當時の社會は有形無形共に一大變化を爲すの多忙なる時代なりき。又何の暇あつてか沈思黙考以て文學上の推敲を爲すを得ん。見よ當時の著述中殆んど文學上の作の無かりし事は。明に其の事實を證して餘あるを。

祖
文法書の始

田中義廉氏が我國語文法書の卒先者として

日本文典

を著はしたるも此時代ありしといへども其説くところ悉皆西

洋文法書の直譯といはんも不可なきの体裁なりしを見ても。全く翻譯時代の反映なるを知るに足らん。然れども後日純粹文學の興らんとする曙の光は此暗冥の中に含まれ居る事を忘るべからざるなり。

其四 英語學

修むる目的

此時にあたり慶應義塾の卒業生は到るところに厚く聘せられて英學校の教師と爲り。殆んど他の學風を壓倒して全國を福澤學風に化せしむるの勢なりしかば。従つて英學に志すもの日に月に増加して。梅雨後の蚊も雷ならざる有様と爲れり。其修むるは如何なる學科ぞ。恰も幕府時代の漢學の如く。是といふ専門をも定めずして。唯英吉利の文字を讀み。英吉利の書籍を解し。英吉利風の主義を注入するを以て目的とせしは疑ふべからず。謂は

の讀むところ

ゆる實利的にして之を以て身を立て之を以て社會に交らんとするに出でたるは十の八九なりけらし其讀むところは如何なる書を其初歩よりして三つ四つ言は

ユニオン讀本

ウエルソン讀本

ビネオ文典

バーレー萬國史

グードリッチ英國史

同 米國史

ギゾー文明史

バウクル文明史

ウーランド經濟書

正則變則

の如き是なり謂はゆる正則變則といふ言葉の起りしも此時に

て官立の外國語學校等にて規則立つたる英語の教育を受けたるものを正則と稱へ。慶應義塾の如き唯英字を知り英書を讀むに止まりて英語を話し英文を綴るを意とせざる教授法を變則と呼ぶは今も同じ事なれど此時の變則流の發音の實に抱腹に堪へざる事も甚しかりしなり或人『チーボー』近隣の文字を誤りて『チジボー』と讀み『サーキセス』人名を『エキセルエキセス』と得意で讀みしは余が記憶せる處にて此時代の事ありき。

英學の功績

英學の程度は實に此くの如く低かりしにも拘はらず其人心を勸誘して或は實業的に或は政事的に又稀には文學的に向ひしめし功績の多きは煌として火を見る如く誰か又之を疑ふものあらんや實に輸入時代の思想改造に於て之が原因と爲り又之が結果と爲り七次の時期を招き出だしたり。今英學の事を語るにあたりて忘るべからざるものあり當時之

辭書の困難

を修むるの困難なりしは之を修むる容易なるの今日よ於て想像も能はざる事これなり。中にも辭書の拂底なる否寧ろ無しと言ひんも不可ならざる時にあたりて英書を學ぶ事なれば其勞其苦如何ばかりぞや。かゝる中に現われ出でたる

英和辭彙

の恩恵は豈こゝに大書特筆せずして可ならんや。此書は柴田昌吉子安峻兩氏の同譯に係り。明治六年一月を以て日就社より出版せられたり。請ふ左に其緒言を引きて著譯事業の容易ならざりしを證せん。

(前畧)從來一二の英和字書世に行はると雖も惜らくは完備なる者少し故に斯學に従事する者或は靴を隔て痒を爬の憾なきこと能はず於是林道三郎柳谷謙太郎の兩學友と相謀り英國法律博士阿日耳維氏の字書を原本として庚午の

英和辭彙の出版

春始て稿を起し公務の餘暇を偷み共に對譯を勉む然れども之を刷印するに許多の苦心をなせり。會橫濱の商絲屋平八此事を聞き抵當の有無を問す首として金若干を出し以て我輩の創業を助く因て刷印の器械を外國より購し譯成るに隨て之を刷印し遂に今春に至りて成功を得たり抑此書の語數大約五万五千にして名物の圖五百有餘あり且毎語に口音を附するを以て之を従前の字書に比すれば或は便なる所あらん固より天下の事理窮なく我輩の見聞限あれば桂漏誤謬の憂なきと能はず豈此書完備讀者をして麻姑を學ぶの快愉あらしむると言んや唯英學生の爲に萬一の裨補を計るのみ加之此類の字書刷印の法に至りては本邦先是未だ開けざるもの我輩始て其法を試み此書を刷印するを得たり故に今后字書を刷印する者復外國を仰ぐと

を用ひず是亦開化の一助國益の一端にあらず乎
以て其功の辭書としてのみならず印刷業の上にも大なりしを
知るべし今や新辭彙の之より數等上位に在るもの續々出づる
に當り其創業者の恩徳を將よ忘れんとするに憶ひ起すも亦本
に報ゆるの一ならずや

其五 新聞の創業

東西南北より報知を得るものを西洋の新聞とす我國輸入時代
に在つても四方より諸般の智識を注入し又内外の出來事を報
告するの必要既に起りしかば遠觀の士は其博く得たる智識を
社會に傳へ若くは其當時の社會以上に進める自己の智識を以
て世人を指導せんが爲めに新聞紙を起したり其起原は元治元
年横濱に於て米人ウエーランドが毎月數回發死せし

新聞の起原

新聞紙

なるものにして實に新聞記者の卒先者とも稱すべき

岸田吟香

氏之が主筆たりしなり

續いで同港の外國人は

萬國新聞

を發刊せしが明治維新の初年前後には東京市中にも

内外新報

中外新聞

又横濱には

漢鹽草

などいふもの出で政府にては

太政官日誌

新聞の記載する事柄

の發行せらるゝに至る。先なるものは民間新聞の元祖にして最後のものは今日官報の開山ともいふべきなり。然れども其記載するところは趣味もなき公文と雜報とに止まりて未だ輿論を以て自ら任ずるの社説なるものあらず。況んや放言大聲以て時事を議するをや。況んや悲憤慷慨以て政事を論ずるをや。政府いまだ是等の自由を新聞記者に與へざりしが故に實に其紙上寥々たること今日小新聞の附録にも及ばざる遙か數等の下にありしと謂はんも不可なからん。請ふ左の内外新聞の殘篇を取つて讀め。

當時新聞の体裁

前將軍口口公滯りなく此度の事を御請ありて昨十一日早天に江戸御出立水戸表に向させられ候。一体御觸面にては十日のよしなりしが故ありて延引せしと云。○其御供は銃卒四五百人鎗劍隊千二百人あり。○前將軍の夫人は江戸に

のこり玉びて水戸殿の御館に御引うつりなり。此程横濱に居られし大原前侍從殿昨十一日九ツ半に御入城に相なる其軍勢は薩摩肥前阿波の兵にして皆ライフル銃を持ち其行列眞先に御門の旗を立五人にてこれを持つるの様はなはだ珍らしく。壹人は旗竿をさげ他の四人は竿の頂上より出たる綱を引れたをれざるやう釣合ひを取れり。さて通行のみちすじにては家々戸をとざしは、そ紙札にて目ばりをなしたり通行のとき道路にありし士民はなみ平腹蹲踞せりしかるに西洋人は更に其國人のなすごとくせずして馬上にありて傲然とこれを見物するに誰もどがむる事をせず聊か故障ある事なし。實に日本人の開けたると是にて知るべし。横濱日刊新聞を内外新報に摘録せし一章

○
 閏四月二日(慶應四年)午後零時十五分に品川沖のかたに當りて砲聲さこゆ横濱に於て外國船祝砲をうつかと思ひて袖時儀を見るに砲發の間あるひは三秒あるは十五秒あるひは一秒又は三十秒等にして時間揃はずその音も空砲とはちがひてあとにひびきあり翌三日の夜十時ころ本所のかたに火の光り見ゆ夜半すぎて滅せず五日の夜もまた同じかたに火の光りを見る行徳市川八幡船橋の邊に戦争ありし由なりされどもいまだ其確報を得ざればこゝに其詳あることをのせず

○
 寒暖計の度は三種あり「セルシウス」「レアウ、ミニール」「ハーレンヘイト」と云日用には多く「ハーレンヘイト」を用ひ機械學家

にては多く「セルシウス」を用ゆ「セルシウス」は氷點を零度とし沸湯を百度とす「レア、ミニール」は氷點を零度とし沸湯を八十度とす「ハーレンヘイト」は氷點を三十二度とし沸湯を二百十二度とす故に「セ」氏の六十五度は「レ」氏の五十二度「ハ」氏の百四十九度なり

○彌生の頃世の中いどさわがしかりければ

此春はよるの錦の山さくらさくかひもなく散るぞわびし
 よみ人しらす

○
 中外新聞第廿四號に載せたる看客の總代括囊軒と記せし或人の一封書亦我社中に投與せり始には新聞の益盛大なるを賀し終に各報の重複多きを責む其言實に理ありと雖ども撰者一手に出ざるを以て亦之を如何ともする無き

の意開成社之を辨する盡せり夫れ外篇は固より中外の羽翼にして雜報亦内外の鼓吹とす極めて複出を嫌ふと雖も猶偶合あるを免れず況や頃者江湖新聞遠近新聞新聞事略の類輩出して既に六七種の多きに至れり安んぞ能く之を防ぐ事を得んや然れども其甚しきに至ては我全文を奪換して之を横濱の譯稿よ托し或は英佛の寫眞と矯はり造意の圖畫を挿入する者ありと聞く其狡猾抑如何乎や當に新聞報告の旨趣を失ふのみにあらず是をして稗官不正の書と同じからしむ惜ひべきの甚しきならずや我曹恐らくは此弊一旦止まず前後相倣ひ遂に猥褻紛擾人をして厭わしむるの日に至らば各局の衰滅立て待つべきのみ然らば則今日の盛なる誠に喜ぶべしと雖ども安んぞ明日の衰へざるを保せんや是れ我曹の深く憂とするところなり冀く

は將來刻成の日互に各本を交易し有無を参照せん事を彼に詳かなるは此に省き此に載するは彼に刪り務めて公正に歸し踏襲の弊なからしめば則倫敦府百六十餘局の多きも亦企て、而して致すべし豈開化の一盛ならずや但其一時並刻して冥符暗合するは此例を以て規す可らざる者あり是我曹の各社幹事に望む所以にして併せて或人の厚意に答ふる所以なり

實に當時新聞の体裁は概して此くの如くなりしなり之を誠に今日の大新聞小新聞に比べ見よ其幼稚なる有様は二十六七年の小新聞どころか地方新聞も數歩を譲らざるべからざるを發見せん然れども時としては紙末の餘白に時事を詠吟せる詩歌を添へたるが如き無味の中にも趣味あらしめんとどの工夫は凝らしつゝあるが如し其『中外新聞第廿四號に云々』の論説の如

きは之を今日の新聞紙上に見出すも耻かしからぬ文字にして。亦た當時新聞の實況を語るの詳なるは特に之を摘録して余が説くところの足らざるを補はしむる所以なり。江湖新聞の生れたるは明治元年に在りて其半生を新聞事業に殉せしめたる

福地源一郎

氏之が産婆たりしなり氏は『新聞紙實歴』に曰く『慶應二年再び幕使に隨行して英佛二國に駐在せる凡そ十ヶ月の間敢て繁劇と云にも非ざりければ巴里倫敦の諸名家と會して新聞紙の事を問ひ其内外の政治に關して輿論を左右するものは即ち新聞の力なりと聞きあはれ余にして若し大學文章あらば時機を得て新聞記者と爲り時事を痛快に論せんものと思ひ初めたり』と氏又曰く『竊に條野傳平廣岡幸助西田傳助の三人に謀り

日々新聞

乃ち四月上旬を以て新に江湖新聞と名けたるを發兌刊行したり今日^の如き活字も無く活版も無かりければ之を木板に彫刻して馬連摺^{ばな}にしたり而して江湖新聞は半紙二ツ切にて每號凡そ十枚乃至十二枚を一冊とし是を綴れば取も直さず今日の雜誌の疎末なるものなり其体裁は雜報あり寄書あり時論文ありて其草稿は盡く余が一人の筆に出て其淨書の如きも時として余自から板下を書き概ね三日若くは四日毎に發兌を試みたるに諸種ありける中にも江湖新聞は尤も發兌の部數多しと稱せられて頗る世人の矚目を惹きたり』と以て此新聞の起れる所以と及び其創業時代の萬事不便困難なりしを知るべし而して其不便困難を極めたる孤軍城中に籠居して此新聞大業を成就し此開明の電氣燈を掲げたるものはもとより時勢の然らしむるところとはいへ抑も亦福地氏の大功に歸せざるを得ざるな

り。然るに幾もなぐして江湖新聞の發兌を禁せらるゝの不幸に
遇ひしが遂に五年二月を以て其第六千九百號の長齡を今日に
見るの

東京日々新聞

は創立せられたり。而して岸田吟香氏は其筆權を握りたり。然れ
ども猶其雜報新聞にして謂ゆる社説なるものはあらざりし
なり。其報文体の如何なりしかは左に拔萃するを見て知るべ
し。

江湖叢談

豊岡縣下豊岡町籠旅屋幸七方に怪敷体の者晝
寐し居しを番人頭雲八及勝次郎外二名の者兼て見込の儀
有之捕縛なすべくと立向ひたるに右は強盜庄吉と云る者
にて忽ち抜刀して切り掛たりしが雲八以下の者共戮力し
て遂に之を捕縛せり縣廳大に賞し以後の獎勵と成るべ

くとして雲八及び其倅勝次郎へは金五百疋宛外二名は三百
疋宛下し賜りしと也

○

新潟縣貫族新發田住

君安太夫三男

祐次郎

右の者戊辰夏中發狂の上同六月十五日父安太夫寐所へ至
り脇差取去りし様子なる故安太夫之を取上んと追來りし
を右祐次郎立戻り肩先より乳の下七寸程切附其他數ヶ所
疵を負はせたりしに元來安太去中風の症にて衰弱の折柄
破傷風と變じ醫療不叶して同月十八日曉病死おせしに付
舊新發田藩に於て入牢を命せられ今般新條例に凡瘋癲を
發し實父を殺す者斬とあるにより除族の上本月七日斬罪

日々新聞紙
面の擴張
福地氏日報
社に入る

相成るの由

かゝる幼稚のものなりし上に紙面も西の内大の廣さにて葉紙もしくは粗造の西洋紙を以てせし片面摺なりしが七年十二月大に之を擴張し体裁を改良すると同時に福地源一郎氏は入社して社長と爲り主筆と爲り社説の一欄を設けて時事を議する事となれり。

其八年六月廿日千四十六號の論説に曰く

奴隸賣買一條に付日本と白露との間に起りたる差違れは双方の協議にて裁判を魯西亞帝に乞しに此程魯帝の審判にて我國處分に不是なしと定りたる旨の電報ありし趣は四五日前に横濱西字新聞に登録し我が東京の各紙にも之を掲載したり此報恰も此程の樺太割與の治定に於けるが如く比々是新聞社中の私報に係る者にして固より公報に

非す公報ありしにもせよ政府より之を吾曹人民に公知せしめざる間は日本には未だ此事に付公報なしと見做さる可らず併し外交機密に關係しては何時でも人民が鼻毛を抜かるゝ例あり御互にウツカリは出来せまぬ況んや彼の電信私報は往々訛を傳へ實を謬る事多き者なれば容易に信ずるを得ず然れども吾曹は疾より歐洲の電報にて此佳信を得んとを心待ちに待ち構へたる折柄なれば所謂意を以て實を邀る者に類似し姑らく之を信報なりと思ふと欲す若不幸にして虚報ならば吾曹は世上の諸君と共に愛國の熱心を貯ふるの切なるが爲に浮々虚報に引掛り赤髯先生の戲謔に欺かれたりとするも眞逆に國家の大害を招く程には非ざる可し此の奴隸賣買差違の始末を熟考するに吾曹は此一件に付假令何人に裁判を乞ふとも日本人が必

す曲非に陥らざる可し陥るべき理なしと信じたり況や魯帝の裁判たるに於てをや一体白露國は南亞米利加洲の共和國にて新作の諸業に於て今以て奴隸を使用するの國柄なれば近來往々支那より奴隸を買入るゝ事を行ひしに支那にてもさすが内地にては中外の間に於て人身賣買を公許せざるに付き幸に澳門は葡萄牙領たるを以て白露人は澳門を本營と定めて買入を成せしに残酷を行ふに恐ぶの性質ある支那奸商中の尤も狡猾なる者は此奴隸買入の請負を爲し廣東近傍の賤民貧夫等を欺罔し聊の金錢を與へ甘言を以て之を誘引し澳門に來らしめて白人に引渡す白人は其の愁傷をも顧みず歎願をも聞入れず荷物の如く取扱ひて無暗と之を奴隸船に積入れて白露に輸出せしが同國の帆船船アリアルイガ號も例の通に澳門にて此奴

隸積入を致し澳門官吏の證書を携帶して出帆せしに海上にて風並よろしからず止を得ずして横濱に入港したる此の奴隸に賣渡されたる支那人中に港内に於て水中に飛入りたる者あり近傍に碇泊したる英國軍艦の爲に救ひ上られ始末を糺されしに奴隸たる事明白なりしに付き直さま神奈川縣裁判所に引渡しと相成り彼の不幸なる支那人は漸やく哀訴の路を得たり裁判所は此哀訴を取上げて奴隸船の出帆を取押へ船中の支那人を殘らず呼び出して口供せしむるに果して欺かれて奴隸に賣渡されたる者共なりき船長某の一身の才辨を揮て雇奴ケリの賣奴スレと同一ならざる理を虚構したれどもよしや「グーリー」とも「スレーウ」とも勝手に名を附けよ實地を見れば人身賣買に相違なし増して條約濟の隣國なる支那人を日本にて保護せざるの道理な

しと朝野の公論は噴々として茲に傾むき愈々奴隷の裁判を成したるに船長某は通債に苦しみ、マリアルイザ船を置き去りにして逐電せり此に於て其船は賣拂となり支那人は盡く解放して本國に送り返されたり其後白露より公使を我國に送り東京に於て追々と談判に相成り日本にては此裁判を申し渡すべき權利なしといひ白露國の法律では奴隷の禁なしといひ「クローリー」と「スレーヴ」とは別なりといひ遂に若干の金を以て白露人の損害を償はんとを望みたりれども中々我政府にて此を聞入れず遂に双方より書面を以て之を魯西亞帝に訴へ其中立の裁判を乞ふ事に決したり

右に付我政府は魯京駐劄の日本公使擾本武揚氏に命じて答辨書を魯帝に出さしめ白露よりも種々の書面類を持出したれども全体の事柄に於て何分とも白露の方は曲非に判せらるべき趣を先頃曾て私報にて聞込しが遂に斯くは決判と相成し事と思はるゝなり此の慈愛ある美舉を日本に於て行ひたる以來は其勢力にて著しく支那海の奴隷賣買を減少したるに付き魯帝は必ず天理の正道に基き飽までも此慈愛の舉を勸奨して澤を東洋一般に蒙らしめん事を希望せらるべしと信ずる也吾曹は將に他日の公報を待て之を徴せんと欲す日本人民の仁慈を貴重するや已に内國の奴隷賣買を禁じ年季解放又外人の爲に奴隷に陥るを救ひたるの進歩にて明白なり然り而して其人民氣力の進歩に於て依然尙論者の爲に奴隷根性の批評を蒙りながら未だよく憤起して之を排除し能はざる者は何ぞや嗚呼内部の進歩は外部の進歩と並馳し得ざるもの滔々皆然り

諸新聞起る

豈管に奴隸のみならんや
之を一讀せば、當時の論文体は如何なりしか。當時の所説思想の如何なりしか。以て知らるゝなり。
此頃、當り日刊新聞は續々東京に現はれ、當時の名士文人は、おのゝ一方に陣を構へて、或は漸進主義を執り、或は自由民権を説き、筆鋒を鋭うして、文壇場裡に對峙の開戦を爲せり。曰く

東京日々新聞

の

福地源一郎

岸田吟香

末松謙澄

諸氏曰く

報知新聞

の

栗本鋤雲

矢野文雄

藤田茂吉

諸氏曰く

朝野新聞

の

成島柳北

末廣重恭

二氏曰く

曙新聞

の

岡本武雄

氏曰く

横濱毎日新聞

の

沼間守一

氏以上之を五大新聞と稱へて當時の大新聞とせり。此外前には英人ブラウクと云ふ人の發刊せし

日新真事誌

あり後には

鈴木田正雄

氏を以て其名を轟かしたる

讀賣新聞

出で、傍假名新聞の濫觴を爲し、遂に小新聞の巨擘と呼ばるゝに至れり。

今立ちかへりて五大新聞が如何なる形容詞の下に記憶せらるゝかといふに『日々』は太平記風の文章を以て其名高く、『朝野』は文學的に傾き諧謔諷刺の雜錄あるが故に世間喜んで之を讀めり。『報知』は寧ろ翻譯的と漢文的との兩端を以て成り、『毎日』は實着『曙』は過激との評ありしは當時の新聞讀者たりし人々は誰も熟知する處ならん是等如何なる文體が當時の讀者を喜ばしめしかは更に左の二新聞の拔萃に就いて見よ。

『報知』の論説に曰く(八年六月廿二日)

邦人の事物を辨別するに精ならざるよりして甚だしき間違を引起すと多し就中其最も我輩をして今日に箝口黙々する能はざらしむるもの、一例を挙げば曰耶蘇教と洋學なり世人此二の者を以て異名同物なりと誤認し洋學を修むるものを呼で耶蘇の教徒となし其説を聞けば大抵自己

先入の説と相異なる所あるを以て之を辯説邪道と稱し甚しきに至りては其説を主張するものを呼で狂人となすものありそれも無學文旨の頑民なれば何も答るには足らざれども苟くも事理を考ふる先生達が此區別を誤り最初より理窟も何も棚に上げておれば耶蘇なり邪説なり又以て聞くに足らずと云て少しも相手にならず之が爲我輩の拒絶せられて思想を聞かざること既に幾度なるを知らず噫是吾輩が耶蘇教と洋學との區別を説き明すに汲々として箱口黙々する能はざる由縁也

我輩は先づ此區別を説き明す前に宗教の何物たる學術の何物たるの大意を手簡に論せんと欲す 宗教は神を敬し神を恐れ神を愛し神を拜し神の命戒には理非曲道をも問はずして黙従すべし即ち英語にてバツシーブ、オベジエン

スと云ふとを教るものなり此意を推し擴めて考ふる時は詰り宗教なるものは甚だしく人間を見下げ果て人間の力は弱きものなれば是非とも神様に御頼み申さねばならぬ故神を愛し神を恐れて神に事べしと教ゆるなり然れども學術は之に異なり人智を研き人力を強め人間をして神力に打勝ち神力を支配せしめんとするものなり此の説き明しに依て我輩は宗教と學術と相反對したる點を見出すなり曰く宗教は神力を強くし人力を弱くするなり然るに學術の神力を弱くし人力を強くするものなり我輩が宗教を格別珍重がらぬはこゝ等の故を以てなり前に「バツシーブ、オベジエン」といひしが此言葉は耶蘇教の最も主とする所にして我輩の考にては此言葉が殊更に人智の發達を妨ぐるものなりと思はるゝなりすべて智力の發達するは事物

に疑を容れて精しく理窟を研究するより起るものなりを
れに今自己の腦力をば使はずして神さんの云ふ通りのと
をば何でも本とふの事にして間違なきと承知せよと教
ゆるは智力の發達を止めずして何としやうか我輩の常に
智力を研き腦力を強めんと欲するに當り宗教に依頼する
能はざるも此他に道理なし我輩の所謂洋學なるものは智
力を發達せしめ神力を殺ぎ人力の領分を廣めて神力の領
分狭くせんと欲するものなれば正に耶蘇教の主意と相反
するものなり斯く發揮としたる區別の明なるに世人の之
を混同するは何ぞや蓋し皮相の爲に欺かれたるものにし
て無理ならぬとあるなり試に歐米の文明國の人民を見る
に此範圍内より越絶するものは尠なくして大抵は耶蘇教
を奉じたるものなるを以て終に世人が宗教と洋學とは名

こそ異なれ其實は同物なりと誤認するに至れるなり然り
と雖も洋人は兎もわれ角もわれ我邦の洋學者必しも耶蘇
を信せされば縱令洋學者の説は孔子様の御流儀と異なる
所ありと雖も強ちに耶蘇の説に非ざるなり其人亦必しも
狂人にもあらざるなり我輩切に士君子に希望す新出の議
論が如何に諸君の先入の説に違ふとあるも必ずしも狂説
妄言のみに非ざるが故に猥りに之を拒絶するとなし唯理
の在る所を目的となし共に討論研究すべきなり頑然とし
て舊説に固執し却て自己の文旨の耻辱を暴すをなすとな
かれ我輩は自己の胸間の鬱結を解き并せて世の抱惑の諸
君に示さんとを庶幾し爲に教學兩岐の辨解を作る

『朝野』の雜録に曰く。

遷上ノ秋色

濕上子一夕濕上ノ堤ニ歩ス秋氣肅然トシテ新霜將ニ飛ハ
 ントシ落木蕭々トシテ四顧スルニ行人無ク唯ダ老蘋枯荻
 ノ空船ヲ擁スル有ルヲ見ル濕上子嘆シテ曰ク噫衰ヘタル
 哉我が郷ヤ夫レ春風胎蕩トシテ櫻雲空ヲ蔽ヒ香園紛陣ノ
 長堤十里ニ充滿スルニ當テハ酒樓茶肆到ル處繁華ノ氣象
 ヲ競ヒ金弦鳴リ綠酒漲ル千金一擲以テ濕上一夕ノ興ヲ買
 フ者日ニ陸續トシテ來ル亦盛ナリシニ非ズヤ然ルニ今ヤ
 紛奢全ク迹ヲ歛メ寥々索々トシテ歌舞ノ暖響ハ寒雁ノ哀
 韻ニ化シ裙釵ノ嬌態ハ殘柳ノ疎影ト變ゼリ誰カ復タ一樽
 ノ濁醪ヲ提ケテ水東ノ勝景ヲ來リ訪ハンヤ同ジク濕上ノ
 地ニシテ榮枯ノ瞬頃ニ變ズル斯ノ如キハ亦タ驚カザルヲ
 得ザルナリ一釣客有リ竿ヲ抛テ濕上子ヲ顧ミテ曰ク叟何
 ゴ喃々タルヤ夫レ濕上ノ地春來レバ忽チ繁華ニシテ秋到

レバ忽チ憔悴ス夫レ年々同ジク然ル所ナリ今ニシテ衰フ
 ルモ春風一タビ花ヲ綻ハスノ時ニ至ラバ再ビ其豪華ヲ見
 ルヤ必セリ何ゾ爲メニ傷悼スルヲ須ヒシヤ若シ夫レ之レ
 ヲ大ニシテ一國之ヲ小ニシテ一都其ノ人民漸ク窮乏貧困
 シ域ニ陥リ賈スレテ贏利ヲ獲ズ工スレテ衣食ニ足ラズ日
 ニ以テ凋瘵シ往ク處トシテ苦ヲ訴ヘ痛ヲ呼バザル無ク男
 子ハ化シテ盜竊兒トナル者多ク女子ハ變ジテ利窠子トナ
 ル者多キニ至リ一般ノ社會毫モ活潑ノ生氣無ク喘々然ト
 シテ死ト隣スル如キ形狀有ラバ其憂フベキ果シテ如何此
 ヲ是レ願ミズシテ徒ラニ花木ノ榮枯ヲ哀ミ時氣ノ冷熱ニ
 感ズルハ痴ニ非ズシテ何ゾ濕上子赧然トシテ謝シテ曰ク
 僕過テリ夫レ花木ノ凋殘スルヤ之ヲ醫スルノ術ナキニ非
 ズ彼レニ般七々有リ我レニ花咲爺有リ涼秋ノ天モ亦化シ

テ三春爛熳ノ候ト爲ス可シ若シ夫レ一國一都ノ凋瘵スル
 ハ誰カ能ク之ヲ醫スル者ゾ先生幸ニ僕ニ教ヘヨ釣客臨然
 大笑シテ曰ク我レ知ラズト。叟若シ之ヲ知ラント欲セバ
 試ニ之ヲ此ノ水中ニ住ム巨頭長髯ノ魚ニ問ヘ

祭舌文

明治十年二月十三日濕上子齋戒沐浴シ恭シク一壘ノ葡萄
 酒ト一樽ノ牛肉トヲ具ヘテ自ラ其舌ヲ祭ル其文ニ曰ク嗚
 呼吾ガ心ハ謹慎ニシテ吾ガ膽ハ縮小ナリ生來未ダ嘗テ狂
 暴悖戾ノ事ヲ爲サズ然ルニ汝三寸ノ贅物妄リニ喋々トシ
 テ遂ニ意外ノ禍害ヲ招キ吾ヲシテ飛ンダ迷惑ヲ爲サシメ
 タル思ヒ出ダセバ去年今月今日ニシテ即チ一周年ノ忌辰
 ニ當レリ其日ノ景況ハ如何ナリシト思フゾヤ天色慘澹ト
 シテ朔風雪ヲ捲キ早朝墨水ノ家ヨリ本社ニ至ルノ間既ニ

五臟モ凍斷セントシタリ既ニシテ後事ヲ託シ社員ニ別レ
 ヲ告ケ本社ノ編輯長末廣氏ト同車シテ町用先生ニ隨從シ
 法廷ニ出レバ風愈ヨ烈シク雪愈ヨ劇シ竟ニ汝ガ罪戾ニ坐
 シテ辱ナクモ四箇月ノ禁獄ト一百圓ノ罰金ヲ頂戴シタル
 ハ實ニ本日ノ十一時二十分比ニテ有リキ汝平生巧ミニ辨
 シ細カニ論ズルモ是ノ時ニ當テハ最早一言ノ以テ吾ヲ救
 フヘキ權力無ク黙々トシテ吾ガ獄卒ノ爲メニ叱咤セラル
 ヲ傍觀シタルノミ風雲ノ漫々タル中ニ徒跣シテ獄門ニ
 到ルノ際吾ガ肌膚ハ身ニ粟シ吾ガ手足ハ盡トク龜ス衣ヲ
 解キ禪ヲ脱シテ獄吏ノ検査ヲ受ク嚴寒ノ身ニ逼ルヤ吾ガ
 齒牙悉ク戰フテ汝獨リ晏如タリ亦何ゾ不人情ナルヤ其幽
 室ニ鎖サルニ及ンデハ鐵檻木扇凜乎トシテ一星ノ火無
 ク斂々タル雪片ノ來タツテ窓ヲ撲ツノ聲ヲ聽クノミ坐ニ

一映ノ書無ク身ニ伴フモノハ唯ダ糞桶唾壺ノ二物ノミ豈
 又馬鹿々々シカラズヤ然ルニ汝ハ毫モ吾カ心ノ憂悶ナル
 ニ關セズ飯來レハ之ヲ食ヒ茶來レハ之ヲ飲ミ欣々然タル
 舉動平日ニ異ナルコト無カリシ亦何ソ不人情ナルヤ加之
 獄則ノ嚴ナル吾ガ心惱々トシテ遵奉ノ暇有ラザル也獄吏
 來レバ叩頭シ獄卒來レバ頓首ス猶土百姓ノ戸長先生ニ出
 遣スタルガ如シ然レニ汝ハ動モスレバ平生ノ惡癖ヲ發シ
 來リ時々得意ノ詩文ヲ吟誦シ或ハ隣房ノ人ニ私語セリ是
 レガ爲メニ恐ロシキ呵責ヲ蒙リ殆ト吾ガ肝ヲ潰シ吾ガ腸
 ヲ裂カシメントシタリ亦何ソ不人情ナルヤ幸ニ天公ノ吾
 レヲ愛憐スルト吾ガ精神ノ外物ニ屈撓セサルトヲ以テ纒
 カニ獄中ノ鬼トナルヲ免レ再ビ娑婆世界ニ出テ、縱放不
 羈ノ身ト爲ルヲ得タリ豈危ウカリシニ非ズヤ抑モ汝ハ六

成島柳北氏

國ノ相印ヲ佩フルノ能モ無ク又七十餘城ヲ下ダスノ力モ
 無ク常山賊ヲ罵ルノ烈ヲ學ブ能ハズシテ反ツテ軼生客ニ
 死スルノ拙ヲ免レザラントス亦哀シム可キノミ然リト雖
 トモ吾ガ平生ノ生計亦汝ニ頼テ立テリ豈一時ノ慘禍ヲ受
 ケシガ爲メニ汝ト絶ツノ心有ラシヤ吉凶榮辱將ニ汝ト永
 ク相終始セントス今ヤ一周年ノ忌辰ニ値ヒ思舊感今ノ情
 ニ堪ル能ハズ聊カ懇々ノ襟懷ヲ陳ス汝其レ言ハント欲ス
 ル所口有ル耶汝將タ食ラハント欲スルモノ有ル耶汝其レ
 遠慮スルコト莫レ嗚呼可笑イ哉尙憂
 此『朝野』雜録の二篇は實に瀝上漁史成島柳北翁の筆する處にし
 て今日より見れば聊か小學兒童の口氣を帯び來るが如しとい
 へども當時之を名文として愛讀せしを思へば漁史の文また以
 て社會進歩の度を反射せしものと謂はざるべからず柳北翁の

實に當時文章家の泰斗たり。當時諧謔家の巨擘たりしあり。嘗て『日々』紙上に福地氏の文章平易ならざる可からざるの論を出だし。一農夫の借金を催促するに『借金はなせ越さぬ。越さぬならおれが行く。おれが腕には骨がある』と書き送りしを引きて。専ら其俗文の妙あるを説く。柳北翁之を『朝野』紙上に評して。先生何ぞ『國會はなせ立てぬ。立てぬならおれが書く。おれが筆には骨がある』との書かざるや。と當時傳唱して人皆其好く笑ひするを感心せり。翁の末廣重恭氏と共に編輯局長の任を分擔し。末廣氏を『上戸局長』と爲し自ら『下戸局長』と爲りたるが。後また隱居して『火の番』と爲りたるの滑稽も此頃なりき。

是より先京濱の間に於て西洋人の横字新聞を發行するもの多く。曰く『ジパン、デトリート、ヘラルド』曰く『ジパン、ガゼット』曰く『トゥキウ、タイムズ』(以上英文)曰く『レコ、デ、ジ、ボンの類いよく、盛大を極

横字新聞

新聞發行の

め。探訪を密にし論説を新にしつゝ、勉強するあるが爲めに。我國の新聞また日に其新機軸を出だし。月に其新趣向を凝らさんとする。之を明治初年に比して。八九年頃の景況を觀る時は殆んど人生幼時と壯時との差も管ならず。明治初年より十二年までの計算に由れば。發行せし新聞の種類凡そ五百もありしと云ふ。豈盛なりと謂はざるべけんや。

其六 雑誌の刊行

讀者は前文を読んで明治十二年以前の新聞の數を知れり。今また雑誌の種類を數ふれば

雑誌の種類

- 時事論説を載するもの……………十
- 教育宗教に關するもの……………二十六
- 官令法律を載するもの……………六

経済商法を主とするもの……………二十九
 醫學工藝を主とするもの……………二十六
 文學兵事に關するもの……………十九
 小説の類に關するもの……………十三
 にして合計百二十九種ありしと云ふ中にも時事の書生評論を
 掲ぐるものには
 評論新聞
 草莽雜誌
 近事評論
 攪眠新誌(大坂)
 あり學者の論説を聞かんとするには
 明六新誌
 共存雜誌

あり慶應義塾の

家庭叢談

は書生就學の方向を示し朝野新聞社の

花月新誌

は詩文雑誌の鼻祖にして溼上漁史實に之を編輯せり。ポンチを
以て時を諷する

圓々珍聞

の生れしも此時にして隈巖卒讀するに堪へざるの名を得たる

東京新誌

の顔を出したるも亦當時にありしなり

其七 守舊學派

曰く雜誌曰く新聞曰く外國語學曰く翻譯文体ありとあらゆる

國學の維新
後勢力

新文學創造時代の形況をば語りたり然れども未だ前代遺物の其間に存しつゝある事は讀者或は知らざるべし明治維新の革命は實に舊習を一洗して新天地を開闢せしものなりき而して此開闢せられし新天地に入り込まんとするものに二者あるを忘るべからず二者とは何ぞや曰く幕府轉覆の主動者たりし國學神道の再興曰く舊習打破の勸奨者たりし洋學洋風の流行是なり後者の事は既に言へり國學神道の維新後に於ける勢力は如何なりしか讀者また之を知らんと欲するならん

るも、國學神道が徳川幕府の下に如何なる待遇を受けしかといふに諸君も知らん平田篤胤氏は其晩年に著述を禁せられ江戸に住居相成らざるの嚴達に遇ひたる事を實に國學者は幕府に嫌はれしなり幕末に勤王攘夷を唱へて獄中の鬼と爲りたるものは概ね國學の徒たりしなり維新の大業一たび功を奏す

平田風の國
學おこる

るや朝廷大に國學の徒を用ひて復古の政を佐けしめ京都には大學を置きて大に平田風の國學謂はゆる皇學なるものを興し更に教部省を置き教導職を設けて皇道を説き神教を布かせ給ひしかばおのづから開進主義の流行する反動として平田門に入り平田風の學問を爲すもの日一日よりも多さを加へぬされば明治六七年の頃に至りては東京に來り集まる書生或は教導職と爲り神官と爲るを目的とするもの、少なからざりしは當時書肆の店頭を埋めたる青表紙と黄表紙との書名を讀みて大方い知られん余が記憶に残るものを掲ぐれば

古訓古事記 古史成文

古語拾遺 祝訓正訓

古道大意 古道訓蒙頌

神德略述頌 古學二千文

皇典文彙

玉鉉百首

古道大意

俗神道大意

西籍概論

出定笑語

靜の岩屋

伊吹風

の類之に加ふるに、教導職試験問題を解きたる如きもの數ふるに暇あらざりき。以て彼の福澤學風に對陣しつゝありしなり。『學問の勸め』一たび現れるゝや。或は楠公の忠死を權助の首くゝりに比せしどて『楠權論』を『日新眞事誌』に寄せて駁撃するあれは『福澤氏、楠公ノ忠臣チリ』と『報知新聞』かに論じて近來楠公の社を所々に建築するに至りしは全く其反動なりといふもありて。一時新舊二學派の争は世間に喋々しかりしなり。篤胤氏嘗て詠じて曰く『月花を我もあはれと見てはあれど、あはれとらたふ暇なかりけり』と。平田の學風は詠歌の彫琢を事とせ

楠權論

歌は如何

ざるなり。然れども慷慨悲憤の情之を有りのまゝの言葉に發して以て歌ふは、亦其學風の常なりしが故に。此時代には文學上の歌おこらずして謂はゆる『議論より實を行へなまけ武士國の大事をよそに見る馬鹿』的の作おこなはれしは蓋し時勢また之を然らしめしに因る。嗚呼歌なり詩なり其文學上の作を當時の創造時代に求めんとするは抑も魚を山に漁するの類なり。眼を轉じて他の詩界の有様を見よ。『陸軍學佛海軍英舊習一新兩至精請見他年大成後。神威却歴三州兵』。才子負才愚守愚。少年才子不如愚。誰知他日成功後。才子不才愚不愚』の如き口吻のもの最も世に行はれ。湯屋に牛肉屋に其吟聲を聞きたる時代よ非ずや。夫れ此くの如し守舊學派と開新學派との相違さかり相衝突するの甚しきは。一は東せよと勸め一は西せよと説く而して文學といふ觀念に至りては彼も此も未だ有らざりしなり。そもく

國學者は舊幕府を倒すに於てのみ力ありしもの豈洋學者の新社會を進むるの方向に羅針盤を取りしものと其功日を同じうして語るを得んや。而して此くの如く國學者の空論に傾き洋學者の實利を主とせしものが他日相親睦し相指導するの曉に於て一は形を古文學に變へて社會に現はれ一は聲を新文學に發して世上に立ちつゝ復た軌轢の跡を見るなきに至らんとす抑も亦時なるかな。

其八 結論

總論を讀みたる諸君は知るらん文學は政界の出來事都合よくして社會多忙ならざる時に發達するものぞと言ひし事を概していへば今日とても世間萬般の事業わづかに改良の緒に就きやゝ進歩の途に向へるのみ未だ人心閑を得て餘ある時節には

達せざるなり。加ふるに有形の文明を取り來れるの忙はしき豈食はずして歌ふの迂を學ぶの暇わらんや。之を庭園を造るに譬ふれば岩石樹木の配置わづかに成りて其根に培ひ其發育を望むの時。いまだ苔蘚細かにむし百卉笑ふの美を期する能はざるは固よりならん。文學が社會の裝飾なることは既に言へり。此かる社會に於て其裝飾たる文學の發達を見がたきこそ自然の勢なれ。殊に維新後十年間は創造時代の猶創造時代にして有形無形共に海外より取り來り其配置の具合を見定むるに於て暇なかりしかば。獨り文學のみならず諸般の事すべて其特殊の發達を望む能はず。寧ろ之を勸奨する者も無かりしなり。既にして配置漸く成り雨降りて石土固まらんとするに際し。不幸にも再び社會を震動せしむる一大事件は起り來れり。今や征韓論は破裂して西南戦争と爲らんとす。世人の耳目は等しく此

政事の局面に向つて注射せり。寧ろ靜に机に對して文字の上
其思想を馳せしむるの餘裕を有せざりしなり。此に於て西南事
件は僅に其基礎を固めんとしたりし文學社會を再び根底より
動かし始めたり。岩石は轉倒せり。樹木は萎靡せり。是より數年の
間文學團はしばらく寂寥の中に立たんとす。

(三)第二期……………謂はゆる反動時代

(一)總論

戦争の影響

戦争は如何なる時代を画はす。著るしく衆人の注目を惹くもの
あり。其結果は社會の上層より下底まで極めて大なる影響を蒙
るものなり。殊に西南戦争の起れるや。維新の創痕未だ全く癒え
ざるの時に當つて其創造の社會を動搖せしめたるが故に。第一
期に於て漸く發せんとせし文學の萌芽は無情にも引抜かれた

新聞紙の進
運來る

り。故に戦争終つて數年の間の文學上に一も見るべきものな
りしは少しも怪しむに足らず。唯此時に於て殊に注目すべきは
新聞紙に對する影響と。一冊讀切の小本の續々出版せられたる
こと。是なり。
我國さきに西洋の文物を輸入し來りてより。新聞紙は中んづく
著るしき發達を爲すべき徵候をあらはしたれども。平常の時に
於て平常の進歩を爲すに過ぎざりしが。此戦争の新聞紙に對し
て莫大の刺撃を與へし事は。疑ふへからざる事實ありとす。見よ
是までは空論を羅列し公文を記載し若くは外國新聞を翻譯し
て紙面を埋めし新聞も。今や進んで探訪の業を擴張し。戦争の記
事を最も早く報道せざるを得ざるに至りしが。故に其結果とし
て新聞事業は競うて機敏を加へしに非ずや。又一方に於て。従
來新聞紙を購讀するものは都下に在つて。中流以上の。人地方

小冊子多く
出づ

洋風大に行
はる

に在つては官吏其他少數の人に過ぎざりしを以て販路極めて
 狭かつしが戰報一たび世人の耳朵を襲ひしより甚だ廣く購讀
 せらるゝに至り従つて其業に従事し刺撃と發達とを與へしに
 非ずや加ふるに戰爭の報知を載せたる小冊子は多く發兌せら
 れ愛讀せられつゝ文學上の産物を促し來らんとす『明治天平記』
 は其最たるものなりき

戰爭は終を告げ西洋心酔の政事家は内閣を組織せり西洋の風
 俗習慣は社會の上より下より喜んで迎へられたり社會の交際
 場裡に馳せんとする紳士は今や競うて洋服を着し洋帽洋靴
 を穿ち其乗る車を洋風にし其居る室を洋風にし以て後れざら
 ぬ事を欲す其流行従つて亦女子社會にも及べり女學生は靴を
 履かざるべからず洋書を携へざるべからずエーゼー、シーを筆
 にしエトス、サンキエーを口にせざるべからず外形すでに此くの

民權論自由
論起る

男女同權論

如し精神多少の西洋主義を取らざらんと欲するも得べけんや
 民權論は起れり自由論は發達せり男女同權は盛に喋々せられ
 たり謂はゆる民權論とは天賦人權説より脱化し來れる者にて
 人はおのづから權利を有す人に上下の區別あるべきなし人はす
 べて平等なり故に自由に其權利を主張せざるべからず民あつ
 ての政府なり故に一國の政は人民の意思によつて左右せられ
 ざるべからず人民の意思とは謂はゆる輿論なり輿論に反する
 事の如何なる政事家といへども行ふべからずといふが如きは
 是が民權自由二論者の唱へしところにして其甚しきに至つて
 は共和政治を説くものさへありし程なりき男女同權論は亦其
 變體せしものにして人に男女あるの權利の異同を謂ふに非ず
 女は男と等しく神聖なる人類としての權利を有す是まで女子
 の男子に壓制せられたるの天理に非ずして事實なり男子豈女

理屈論の結

予よりも多くの権利を有すべき理あらんやと。是ぞ其論者が唱ふるところなりしは。讀者も記憶するならん。是等の空論果して文學に影響せしどころ如何なりしか。残念にも文學の之が爲め何の助をも蒙らざりしなり。およそ文學は理屈の發達と共に衰頹否。趣味を變化するを常とす。彼の民權自由男女同權の理屈論は。當時の文學者をして筆を文學に專にするの暇なからしめ。著述にも新聞にも。到るところの製作物を無味冷淡ならしめたり。此くの如きものは。實に十年の西南戦争を距る數年間の形況にして。之を無文學の暗黒時代なりと謂はんも亦不可なからんとす。然れども政府は社會の羅針盤を握りて公衆を指導するの務を有する以上は。暗黒の中に在つても其取るべき方針を見出だし。或は一點の星光により。或は一閃の火影によりつゝ安全に其職務を盡さるべからず。政府が先に學制を設け教育令を發し。

政府の文學獎勵

漢學の衰頹

假名羅馬字の二會

各地方到るところに學校の旗を望み伊唔の聲を聞くに至らしめし事は今更いはず。東京大學文學部に和文科漢文科を置き。東洋文學の研究發達を獎勵し。學士會院を設けて碩學鴻儒を優待し。修史館を開きて歷朝事蹟を講究せしめ。教育雜誌を刊行して教育事業の普及を圖りたる等は。皆此暗黒時代すなはち西南戦争後の出來事として記憶せらるゝなり。西洋の思想普く入り來りたる結果として。當時漢學は甚しく排拆せられたり。其目的を達せんとして『かなのくわい』『羅馬字會』は新設せられたり。外山文學博士が『余ハ假名ノ會羅馬字會ヲ問ハズ。漢字ヲ排撃スルモノニハ何デモ賛成スル』と言はれしも。實に此時なりき。今や假名の會とは如何なるものなりしか。社會より忘れられんとするに當り。いさゝか紀念を遺さしめんとするも強ひて無用にあらざるべし。請ふ左の文を讀め。

さる めいち 六七ねん のころ、せうがくかうを
 まうけられ て、より、をどこも、をんなも六
 さいより 十四さいまで は、かならず いりて
 まなぶべき こと となりたれども、いづれ の
 けん にも、をんな の せいと は、をどこの 三
 ツー にか たらす、たとひ ひとたび、せうがくかう
 に いる とも、ろの ちきりぞく こと はやきを
 もつて、をんな の ちきりは、つね に をどこ
 に おどり、これ と かね を ならぶる こと
 あたはず、これ に よりて、みふん も またが
 て おどれり、これ を かしより た、かひをこ
 のみたる さふら の、さうやらぬ と、こうし
 やか など の をしへ の、まだ ひとびとの、こ

いろ に ぞみわたれる と に よりて の こと
 なり、

是れ『めいち十九ねん七ぐわつ十五にち』を以て『かなのくわい』よ
 り發見せし』かなのでかゝみだいに『がう』に載するところの論説
 中の一章なり此會をたして漢文を排撃するの目的を達せしや
 否を此に論斷する能はずといへども其他日和文學發達の伏線
 を爲したるは争ふべからざる事實なり羅馬字會に至つては當
 時の大學教授全力を之に注ぎて其必要を説き社會に向つて大
 聲疾呼せしにも拘はらず殆んど何等の影響をも文學上に留め
 ざりしと論斷するを憚らざるなり。

其二 小説界の繁昌

小説——少なくとも文學上の製作物——の最初の著作ともい

小説最初の
二傑作

ふべきの報知社に其人ありと知られたる

藤田茂吉

氏の

文明東漸史(十七年九月)

なるべし此書は米艦一たび浦賀に來り以て西洋の文明を東方に齎らしたるに筆を起し高野長英渡邊華山二氏の傳を全篇の堅として其間に義人烈士の美談を挟み以て之を横とせりされば歴史上の著作とも見るを得べく政事小説とも見るを得べく又一篇の文明論なりとも見るを得べきなり其一章を示さば

天保十年正月幕府監察鳥居耀藏に命じ浦賀の海岸を測量し砲臺及船艦を検査せしむ代官江川太郎左衛門其所轄の地なるを以て幕府に請ふて鳥居と共に巡檢の事と任す鳥居は林大内訖衡の次子大學頭煌の弟にして儒家出身の人

なり爲人陰險猜忍權畧に富めり當時蘭學の世に行はれて儒生往々西學に心酔し林門の弟子亦鳥跡を去て、蟹行に就く者あるを憤り殊に渡邊華山は一たび贊を林門に委し當世の名流を以て稱せられたるに今西學社中の牛耳を執り頻りに蘭學を主唱するを見て頗る不平の色あり會々モリソン渡航の論說華山の徒に出てたるを以て私かに閣老に陳訴して曰く英人渡航の事畢竟荒唐の談にして近來夷狄の學に心酔せる者の主唱する所なり彼輩妖言を吐て上廟堂を蟲惑し下民心を煽搖す眞に化を亂るの民なり請ふ夢物語等の書を著する者を捕へて悉く之を嚴法に處せん而して夷狄の學は邪說の根本なり宜しく之を禁せざる可らず然らすんば後來國家の大患を生するあらんと此言は當時に行はれさりしと雖ども多少要路の人を動かしたる

を知るべし

之に續いて同社の牛耳を執りたる

矢野文雄

氏は

名士^{齊武} 經國美談(十九年十一月)

を出だせり此書の前者よりも猶一步小説に向つて近づき來り然も政事小説の鋒々たるものにして明治年間に於ける文學上著作の中にて最も廣く讀まれしものと謂はんも不可なからん文章流暢にして趣向亦奇讀むものをして絶えず快と呼びしむ左に拔萃せるは亦その妙處の一なり

巴氏^巴其病^巴日々^巴ニ重^巴リシカ一夜^巴暗燈^巴ノ下^巴ニ在^巴テ熟^巴々^巴既往^巴將來^巴ヲ想^巴へハ悽愴^巴感概^巴ノ情^巴自^巴ラ止^巴ムコ能^巴ハズ前^巴キニ本國^巴ニ於^巴テハ危^巴クモ追^巴兵^巴ノ難^巴ヲ免^巴レ又^巴夕^巴途中^巴ニテハ溺^巴死^巴ノ

厄^厄ヲ救^厄ハレ阿^厄善^厄ニ於^厄テハ幸^厄ニ刺客^厄ノ難^厄ヲ避^厄ケ又^厄其^厄人民^厄ノ厚^厄意^厄ニ因^厄テ僥^厄倖^厄ニモ斯^厄波^厄多^厄ノ強^厄迫^厄逮^厄捕^厄ヲ蒙^厄ラズ今^厄日^厄マテ天^厄ノ祐^厄ヲ得^厄テ斯^厄ル千^厄辛^厄万^厄苦^厄ノ中^厄ヲ恙^厄ナク歷^厄來^厄リシニ今^厄若^厄シ一朝^厄病^厄苦^厄ノ爲^厄ニ此^厄處^厄ニテ死^厄失^厄セナハ今^厄マテ辛^厄苦^厄ノ甲^厄斐^厄モナク我^厄濟^厄民^厄ノ大^厄業^厄モ空^厄ク泡^厄沫^厄ト消^厄ヘ行^厄クヘシ若^厄シ此^厄病^厄ノ癒^厄ヘサランニハ如何^厄ニ口^厄惜^厄シキ事^厄ナルヘキカ昨日^厄ニ比^厄ラヘテ今^厄日^厄ハ又^厄最^厄ト、苦^厄痛^厄ヲ増^厄シタルハ我^厄身^厄モ天^厄ヨリ棄^厄テラレタルカト獨^厄リ臥^厄床^厄ニ嘆^厄チツ、窓^厄ヨリ外^厄面^厄ヲ打^厄チ眺^厄ムレハ月^厄ノ光^厄リハ朦^厄々^厄ニ見^厄エテハ隱^厄レ、隱^厄レテハ又^厄現^厄ハル、有^厄様^厄ハ有^厄爲^厄轉^厄變^厄ノ世^厄ノ中^厄ニ能^厄クモ相^厄似^厄タル景色^厄カナト尙^厄ホモ悲^厄歎^厄ヲ増^厄シケル折^厄シモ遙^厄カノ彼^厄處^厄ニ琴^厄ノ音^厄シテ歌^厄ノ聲^厄サヘ聞^厄ユレハ巴^厄氏^厄ハ耳^厄ヲ欬^厄テツ、斯^厄ル田^厄舎^厄ノ片^厄山^厄里^厄ニ優^厄シキ調^厄ベヲ聞^厄クモノカナ如何^厄ナル人^厄ノ手^厄スサミニ

テ斯ル妙音ヲ奏スルヤト憂キカ中ニモ病苦ヲ慰メ暫時彼
ノ音ヲ打聞ク中ニ琴聲次第ニ近ツキシカ此家ノ窓下ニ立
止リ又一曲ヲ奏シツ、

歌見渡セハ野ノ末山ノ端マテモ花ナキ里ソナカリ
ケル今ヲ盛リニ咲キ揃フ色香愛タキ其花モ過
キ越シ方ヲ尋ヌレハ憂キコトノミゾ多カリキ霜
降ル朝ニハ葉ヲ隕シ雪降ル夜ニハ枝ヲ折リ枯レ
シトマデニ眺メラレ集リ會フ憂キコトノ積リ積
リシ其中ヲ耐ヘ忍ヒシ甲斐アリテ長閑キ春ニ巡
リ逢ヒ斯ク咲キ出ルソ愛タケレ世ノ爲ニトテ誓
ヒテシ其ノ身ノ上ニ喜ノ花ノ荅ハ愛キ事ト知
リナハ何カ憾ムベキ春ノ花コソ例ナレ春ノ花コ
ソ愛タケレ

春酒會主人
出づ

此時にむたり『春酒舍廬』の別號を以て知られたる

ト最下面白ク歌ヒケレハ巴氏ハ大ニ打チ驚キ是ノ歌ハ之
レ數年前我ガ本國ニ在リシ頃戯レニ作リタル春ノ花テテ
短歌ナルニ之ヲ歌フハ心得スト思ヘハ歌ヒシ其聲ハ兼テ
聞知ル音聲ナレハ巴氏ハ窓ヨリ差シノソキ月ノ光ニ透シ
見ツ忽チ思ハス聲ヲ揚ケ
其所ニ立チシハ禮温ニアラスヤ

ト問ハレテ驚ク樂人ハ一時ハ驚キ極リテ未タ答フル辞モ
ナキツチ又モ巴氏ハ聲ヲカケ
禮温ニアラスカ過マリシカ

ト聞クヨク彼方ハ振り仰キ
然カ曰フハ郎君ナラスヤ禮温ニテコソ候フナレ
ト見上ケ見下ス主従ノ其ノ悦ヒハ如何ナラシ

坪内逍遙

氏の多年大學に在りて英國文學を研究し、業を卒へて社會に立つや

該撒奇談

書生氣質

妹背鏡

未來の夢

小説神髓

等を著はせり。蓋し小説に向つて最も多く世人の注目を惹かしめしは氏が是等の作に始まりしならん。藤田矢野二氏の著の如き、讀まれたる事は極めて廣しといへども、其文學の作もしくは小説たるといふ點に於ては別に世人に注目はせられざりしなり。逍遙氏は大學に在りし日より小説に就いて研究せし人な

り。是等の著作は氏が小説に對する理想を現はさんとがために出だせるなり。豈一時に喧傳して最も多くの評判を買はざらんと欲するも得んや。此に於てか文學なるものは殆んど小説のため專領せられ盡せり。史學あれども形を潜め哲學あれども影を隱し、唯小説のみ獨り大手を振つて跋扈を極むるに至れり。逍遙氏は嘗に小説なる名を流行せしめしに止まらず、小説の實を改良擴張せんと勉めしなり。故に我國在來の小説を以て多くは現實社會より隔たれりと爲し、唯今の著者が自身の理想とする處のみを書がんとするに過ぎずと爲し、大に是等舊體の小説を排撃して西洋風に習ひたる作を出だしたり。かのめでたし、的の舊體跡を絶ちて、圓滿に其局を結ばざる悲哀小説の行はるゝに至りしも、全く氏が筆を執つて之を開きしに因る。豈小説界のために之を謝せざるを得んや。

(繼)といつは我輩の願ふ所だ親父の供給が絶えてからは我輩も實に究じたから何か金儲をしあくつては下宿の拂もできやアしない早速周旋してくれたまへがれじやア今朝ッからやつて居るのは即ち其 Translation(翻譯)か(山)さうヨ見たまへ雑と如斯体裁さ(繼)とれく下言ひながら山村譯しかけたる原稿をどつて見る(繼)ヤア随分亂暴な翻譯だなエトなんだ……是ニ因テ之ヲ觀レハ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ蓋シ遠隔ナルサキソシ時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ決シテ疑フ可キ事ニ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ……ハ、ハ、ハ、イヤニ冗長な曲りくねつた變に諷刺的文章だまア羊の腸よりじくたア如斯文体をいふんだらう就中因テ以テ原因セシ所以ノ道理なんざア實に重複極

るじやアないかなぞこんな文を延すんだらう反語ばかりいやに重なつて悪讀くつて解りにくくつて是じや不素人にやア解りやアしさいせ(山)ハ、ハ、ハ、ふつ、けがさだものを文はどうせ無茶苦茶さまかし長くしたは此方の策さ反語を澤山つかつたり同じ事を繰返して居りやア骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出来るだらう何々せずんばあるべからざるありと歎それ然り豈それ然らんやなど、やつて居ると十行二十字は三十分位に一枚かけッちまふ是之を economy of labour(はねはりの儉約)といふ(繼)ヤレく斯いふ翻譯者の手に成た翻譯書を買ふ奴は可憫だしかし我輩も其法でやらかそう二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山)ヲット承知だそれじやアページトエンチー(二十葉)から〇かうット〇ページサルチー(三十葉)ま

で君にやろう。汗牛堂へは明後日ゆくからなるべくせいでして譯したまへ。十枚で二圓五拾錢にやアなるから(書生氣質)

妹背鏡

時しも八月のはじめつかた夕陽西にかゝやきて夕立全く收まり虹麗しう引渡したり今しも九段阪を登るとて共に人車より下り立たるはそも是如何様なる人物ぞ一個は年の比十九あまり縞の重ねを涼しげに重ね被て傘深やかにうちかさしけり一個は年の比廿三四誰が目に打見やるも下婢なるべし坂の中程に至りしとき下婢は牛が淵の方をゆびさし娘に打向ひて聲をひそめ

下女お雪さま……奥さまごらん遊ばせよ、がアノ何でございますヨ、わのお辻さんが身を投げました所で

(お雪)あゝさうだつてネエほんとに可憐的に……互ひに思ひあつて夫婦になつても……
トいひかけて歎息を吐きあどをいひさして黙然たり

お雪は悵然たる面をひそめて

(雪)ア鎌とした事が何をおいひかと思つたら……ア

ヤマアとんでもない事をナンノわたしがそんな事を……
……今……今いつたのはさうではないわたしがお辻さんのやうな心で耻も後先も考へなければ……

下女エ、

(雪)死んでしまひたいと思ひますヨ。

新聞紙にあらはれたる影響

「下女どん……どんでもない事をおつしやいます。
 (雪) イ、エサ生中に學問をしたのか今じやア……今じやア眞成に……ア、わたしの苦の種だア。
 (下女) 否ですヨお雪さまろんなイヤな事おいひ遊ばして何で……何でアあなたは……
 トいひつゝお雪の貌打まもれば。
 (雪) ナアニ何様な悲しい事があらうと私は自分の手で死ぬのなんのどそんな卑劣な事……爲はまないがチナニネれまへには話してもわからないわたしの悲しさを知ッてる人は日本に幾人もなからうと思ふアア、あじさない身の上だア。(妹背鏡終局)

是より先き新聞紙は大に文學欄内に力を用ひ殊に小新聞は艶麗なる文章を競ひ或は圓滑なる筆を用ひて人情の微を畫がく

新体作者の反動おこる

事を勉むるやうになりたるが逍遙氏の小説一たび出で、世の注目を惹くや新聞雑誌に従事したりし文章家は又争うて其筆を小説界に馳せしめんとするの傾を生じ其影響は早くも東京大學の文學生に傳はりて又往々小説家たらんと志す青年才子を其中に見るに至れり。

饗庭篁村

氏が小説家として名を博せしも此頃なりき氏は逍遙氏および大學の人々とは大に趣を異にし之に對しては寧ろ守舊派の位置にあり氏が筆の輕妙にして又よく人情を穿てるは讀賣新聞讀者の常に知る處からん其著作に大あるもの少なしと雖も謂はゆる筆の枯れたるがために之を讀みもてゆく内に覺むす妙と呼び快と叫ばるゝ處多し。

堀出しもの

苦樂 勝関

墓村氏馬琴を祖述す

等は其傑作と稱せられしものなり氏は又大に馬琴を祖述し之に關する研究に世人の眼を惹きたるは逍遙氏と共に與かつて方ありとす。

掘出しもの

夕日は山のあなたに没て尙ほ西の空に彩りたる雲を残し飛鳥は林の方に向ひて輪の形ちに旋りて黒き群をなす丘の松は青く蓋を張りし如く畑の菜の花は黄金を敷きしに異ならず細くして清き流れの山を出て遠からず谷の奥なるおくれ咲の櫻の葩を乗せたり岸に一個の大岩あり斜めに川に望みて下より見れば今にも落ちんかと怪ふまるれど岩の上には小松躑躅など生ひて宛然蓬萊山の形をなせり鬚なき太公望の休み處角を叩いて謠ふことなき響威の

腰掛ならん此の傍らにまた平面なる石の川に出て水を掬ふに人してわざ／＼なせる如きあり根芹蒲など青々とし折々それに動くは魚の戯るゝにやあらん不意に水音をさする蛙の飛入りしなり小田を耕す頃なれば水も過來し村々へ引かれぬ爲めか静なれども常よりは勢はやし此へ一個の年若き農夫の來かゝりしが例の相識の石と見え草の上へ辨當の包を置き石の上を下り立て先づ己が爲には正宗にも増す得物の鍬を流にて洗ひ次に脚半穿きたるまゝの足を濯ひたり脚半と見えしは泥にして洗へば清き足となれり左れをそれを拭ひて疊附の駒下駄を穿かへるといふ譯にていなく其まゝまた跣足なり夫より泥だらけの顔を洗ひ次に水一口掬ひ飲み始めて欣然と立て四方を見たり若し是を盥の水にてせば如何あらん先づ鍬を

洗ひ次に泥足次に顔を洗ひ跡にて其水を飲むとせば随分汚なき事にして倒行逆施などいふべし然れども流るる川の清き事はさばらも止らすして誠にしかも元の水にちあす此に臨みては斯くするが却つて順序の正しきなま鳴呼流るゝ水の清き事は若き農夫は我が一日の業を終れりと満足げに四方を見たるが何か思ひ出す事ゆけん潔き眉を打ちひそめ亦一たびは眼を閉ぢたりやがて彼の高岩の上に立ち更に四方を見廻したり山は夕陽に赤かりしもや、薄くなりて白く黄を帯びたる空となり森は黒みて時を争ふ鳥の聲噪しく見渡す限りの村々は遠く近く籠の煙り立のぼれり若者は此の夕榮の景色を眺めて詩を案ずるか歌を詠まんとにや將た俳句を吟じ出さんとするかえはらくは眼を轉せ足

も移さず立しまゝにて其身は立ちしまゝなる事をも忘れたる様子なりしが頓て巖を下りて柔かき草の上に座りたり(堀出しもの首章)

此時「有喜世新聞」後の改進新聞に

須藤南翠

氏あり氏の文章は逍遙簞村の二將とも異にして寧ろ雄健の傾あり然れども氏は又た他の文章を模寫するに巧にして或は馬琴の如く或は三馬の如く時としては洋文翻譯体の事あり時としては漢文直譯体の事あり變幻自在の妙を得たりとの評もありしなり概して言へば氏の著作ハ其の舞臺廣くして變化に富みしは、奇想天外より落つる事あり少なからざる著作の中に

新装の佳人

黄雛鷗

照日葵

朧月夜

こぼれ松葉定時刊行

等を以て其最とす。

旅世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそはだしな
 りけれど在五の君が詠給ひしを今も同じ文字なき歌とて
 吾も人も賞断すなるは自然に出て同じ字を用給はぬ中
 將が巧を褒るのみなりしに今此山に分け入て歌の心の微妙
 くも實を寫し出せしを只管感じ想ふなり然はさりながら
 羈絆にと思ふ人には得遣すして思はぬ雪に行患み此處を
 何處と問ふ人もなこそこの關を踰てより踏迷ひたる此山中
 常磐御前が艱ひし鳥羽の嶮は里近けれと何れを見ても雪

照日葵

より雪の白き峰上の其外には乗とすべき物もなき憂の山
 路に行暮ては宿借る賤が伏屋もあらじ今宵一夜を如何
 して何を食ふ明すべき殊には痞寒の胸苦しく足さへ痛み
 て今はしも一足とても歩まれぬは守の神の不孝をば責給
 ふ予と覺えぬると歎ひに沈み雨の手を呼吸の息に温め
 つゝまた仰向て天うら瞻望 旅はや日は全く暮しと見
 ゆるに何時まで此に行立ても往返ふ人には得逢ふまじ思
 へば仄かに入相の鐘の音耳に入りたれば山寺にてもあり
 ぬべし寺ある時は里とても然まで遠き事はあらじ何れ
 にもあれ行々て是非に一夜の宿請んと白問自答に心を
 定めまたも深雪を踏分けて覺束なくも辿らるゝ此の少年
 を誰かといふに今は其の名も女川氏力松としも呼ぶれど
 誠は名取の御息女糸萩姫が御果なり昔しは深殿後園に翠

帳深く垂籠て清女が才の香爐峰簾を掲げて見給ひし雪の
眺望は身に積る今は旅路の雪の山手足の切る、冷たさに
忍びて辿る林原狐兔の足跡幽かにも心憑めに往く姫が胸
は氷も裂くばかりの憂想ひとぞ知られける斯る山にも栖
ひ人のありと覺しく怪し氣なる丸木柱を結びかけ柴と草
とに背く家根も傾さかゝる粗壁に獸の皮を張晒し名のみ
は残る草の戸の生垣のみ、枝繁み厚く頂く雪の間に火影
幽かに閃めくを糸萩姫の力松は認めて心嬉しくも足さへ
自と進されて件の門に辿りつさ戸をほとくと打叩けど
雪に聲をや隔られけん應と答ふる人なきに力を極めて叩
く戸の上に積れる雪散て顔に飛散る白妙の細腕は猶止
まず(照日葵)

同胞は相携さへて後園の方に進んが爲め霜溶に路を造り
たる藪の上を渡りて風流なる路次を入らんとせり恰も此
の時逆しまに彼方より出来る美人の一群ありて櫻町同胞
と正しく相對し相突んとせり是れ一步彼れ一步約さねど
も踵を反して相佇立り、彼方よりは入るを待ちて此方を
凝視し此方よりは出るを待ちて彼方を凝視するうちにも
婦人の約やかなる眼は疾くも履物より着服帯より半襟容
貌頭髮梅金釵根がけ、頸脚毛際に至るまで微細に之れを觀
察し盡し若し一步を過んには其の後姿より運歩の風致を
も見んとは願へるなり照子が衆くの目もて吾れを熱視せ
らるゝ間に觀察したる中に就きて殊に勝れて深く其の記
臆に遺りしものは第二番目に在る處の美人なり若し單に
美といふ語が萬能の働らきを有して之れに勝る形容詞の

なからましかば美なる語り此の婦人の爲めに固有專取せ
 らるゝならん今眸子を凝して照子を視たる眼は愛の神
 …若しもあらば……の假に姿を變じて渠が双眼となり
 しが如く黒き眸子碧の眼夫れを覆ふ睫毛の長さ槩ゆる美
 術家が意匠を凝し神を碎きて彫みたる人形とても之れに
 は及ばじ視て微笑を含みたる口は如何なる麗しき聲を包
 める歎側らに匂へる未開紅の苔ながらにして紅なりとも
 評すべし細くして隆き鼻濃くして長き眉殊に卵に肉づけ
 たるが如き顔の嬋妍たる白き額に眉をも掩ふばかり惜し
 氣もなく剪り垂れたる前髪の娉婷たる夫れさへあるに濃
 さ房やかなる頭髮を油氣もなく束ねて僅かに一輪一簪の
 薔薇花を挿して彩れる姿の清楚なる衣服はと問はゞ白き
 頸の間に見ゆる半襟は齒ひに對して濛きに過れども黒縮

緬の地の見えぬまでに鼠及び茶の二種もて雲形に縫綴た
 るものなり上に淺黄地に浮摸様ある縞珍緞子の被布を纏
 ひ桃鶯色の總角胸の左右に流れたり下より出るハ薄紅か
 けの裾模様におとなしき幽禪の無垢を襲ね絹足袋に塗下
 駄を穿ちたる姿の窈窕たる神女の肖像魂魄を得て再び人
 界に生じたるが如き威嚴をすら溢るゝばかりの愛嬌の裡
 に供へたり之れを照子に比するに連ぬる壁双の花精かに
 言はゞ照子の方は皮膚と品位とに於て渠に譲り昂き杖を
 以て渠に勝れるなり實に造化は妬み多くして萬全を興へ
 す此の美人の一點の次所を尋ねんには只だ一の小造にし
 て華奢に過るを數へんのみ

「チヨイと兄さん——照子が忍び音
 「ウム分ツたヨ——同じ聲なる春行が答詞(朧月夜)

手柄を争つたので、風呂敷の中から採つたのが溢れて四方に散るといふ大失敗周章で、拾集める中に娘は笑ひながら一ツも残さず採つて仕舞つた。自分が見着たのを横取するの、非道い返して下さいと争つて見たが娘は情強く笑つて居て返しさうな様子もないから自分は口惜くなり、やっさとなり目を皿の様にして、澤山ある所を、と見廻はした、運よく又見つけた、向ふの叢蔭に、が運わるく娘も見つけた。(初恋)

此頃よりして有形無形社會の進歩は漸く整頓し、世人の心や、閑なるを得たりしかば、當時の謂はゆる文學すなはち小説の到るところに歓迎せられ、小説に對する世人の着目は其區域を擴めて、遂に往時の小説書類をさへ欲するの念を起さしめたり。此に於て或は馬琴或は京傳、一九三馬春水種彦等の作は斷翰零墨

古小説の出

兎屋

といへども人争うて之を読み、書肆は我劣らじと古小説を出板するの機運に向ひしかば、明治十五年には稗史出版會社まづ起つて里見八犬傳其他の著作を發刊せり。此頃南鍋町に兎屋と稱せし書店あり、自ら天狗書林と號し極めて廉價に書籍の出板を爲し、かば種々雜多の本は其紹介によつて世人の手に入りしは讀者或は猶記憶せん。井上勤氏が反譯に係る『八十日間世界一週』『海底旅行』『月世界旅行』『狐の裁判』等の諸書は此書店より出でたりき。然れども是等の書は眞の直譯に過ぎずして趣味に乏しく、高尚なる文學書もしくは小説として見がたき、誰も知りたるべし。

此くの如く文學上の著作おもに小説は廉價にて容易く世人の手に入る事と爲り、加ふるに上下久しく恬熙に慣れて其嗜好普く學生の間に行はるゝに至りしかば、今や隨時發兌の流行小説

小説の實際
社會に於ける影響

小説雑誌の
發兌

を知るに非ずんば交際社會に入る能はざるの勢を爲し従つて小説家の名聲は都鄙遠近に喧傳せり而して新聞社の争うて小説家を招聘し書肆は争うて小説類を出板し尋いで小説雑誌の發兌を促し出だすに至りぬ此に於て金港堂は

都の花

を出だし春陽堂は

新小説

を出だし其後暫くして博文館は

大和錦

を吉岡書店は

新著百種

を出だせり此くの如く小説界をして賑はしむるに至りしものは獨り前に述べたる二三小説家の力のみならず抑も亦氣運の

然らしむるものありしなり

是より先き森田尾崎幸田等の諸氏出で、名聲や、喧すしく、れのく、文壇一方の將たらんとする趣あり而して

森田思軒

氏最も其魁たるものあるべし

氏は夙に報知社にありて洋文の反譯に従事し其平素養ふところの漢學の力に加ふるに西洋文學の趣味を以てし一種獨得の小説体を構造せり其文たるや井上勤氏の如く無味ならず又黒岩涙香氏の如く平易に流れず寧ろ文學無きものに對しては佶偈にして解しがたき趣なきに非ずといへども其粗大なる漢文体を以て緻密なる社會の裏面を畫がくの妙は氏ひとり巧に之を得たりしなり其著譯書の主たるものは

盲目使者

破茶碗

大叛魁

其他短篇のもの少なからず、

ある夏の夜甚だ蒸し熱して安らかに眠る能はざりければ
マリエッタは纔に曉に向ふを待ちかね其床より起き出でり
曙日の第一の光りは海波を射りレリニアンの小島を射り
更らに來りてマリエッタが小さき室の窓に當り輝やけりマ
リエッタは衣服を着け泉に赴き面を洗はんとて戸外に出で
たてりマリエッタは此の早晨の景色を賞しながら濱邊を散
歩せんと思ひしかば其の帽子をさへ戴けり
泉に赴むかんとするには家の背後なる岩を越え棕櫚と橙
樹との間を穿ちゆかねはならずマリエッタは此のときに限
りて容易に是等の樹間を過ぐることも能はざりし何となれ

破茶碗

ば今進みかゝりし前面の最も少かく最も瘠せたる棕櫚の
下に一個の身材長さ少年が手のホトリに極めて麗はしき
花一束を置けるまゝ熟睡しをるを見ればあり花の上に
は一枚の白き紙の掛りて其紙は少年の呼吸する氣息に従
ひよりくアホち動きをれりマリエッタは之を奈何ぞ能く
輒すくユを過ぐることを得んや
渠は唯だ立ち止まりて戰慄せり彼の少年の何人あるやは
相距ること尙は遠ければ認むべからずマリエッタは直ちに
家に歸り去るべき歎然れども若し此の機會に花の贈りぬ
しを知りなば知るべし若し此の機會を外さんには最早や
永久知るに由無かるべきなりマリエッタハヌキ足走つゝ二
歩三步棕櫚の下に進める折しも忽ち彼の少年の動くが如
く見ゆしかば直ちに身を翻へして家の方に走せもどれり

然れども少年の動けりと見えしは唯だマリニッタの恐怖せる想ひにて少年は依然として熟睡せるなり、マリニッタは再び棕櫚の方に進めり、漸く近づけば漸くに恐怖の念を加へつゝ、今にも彼の少年の突然起りたゝん歎と思へば俄かにオソ、さて復た家の方に走せもどれり(破茶碗)

大叛魁

渠は暫し息をつけり、徐ろに首を廻らして四邊を顧みたれども唯だ夜色の涼然たるあるのみ。此の墙壁の内邊に幾多の喬木ならび立てり、枝を交へ葉を重ねて相ひ茂みたるが其の板の長さものは頗る長くして且つ軟かなれば或は之れに縋して壁を下ることも出来べきが如くに思はれり。乞食僧は斯く思ひつくや否や直ちに彼の喬木の間にも其身

を没したるが忽ち復た兩手に長くたはめる枝を握りもちつゝ、墙壁の上に現はれ出でり。枝は渠の重みにつれて次第にたはみ垂れたるが其の一處の漸くにして墙壁の頂に觸れたるとき渠は徐ろに兩足を墙壁より離して左右の手をもて更るゝ、枝を握り換へつゝ、次第に下りはじめり、之を久くして渠は既に枝の末に至りたり、去れども尙己れと地上とは相去ること三十尺(五間)餘りもあるべし、乞食僧は今ま宙に吊るされ懸りたるまゝ、左右の足を揺かして頻りに何等が足が、りとすべさ處もあらずやと求めたり。火光一閃復た一閃續き起る連發の銃聲、守卒は墙壁を踏えて出づる者あるを見出して之を狙撃したるなり、丸は皆な逸して渠の身に觸れず去れども最後の一個は渠が執り

ぬたる其枝の一處を貫ぬき飛び去れり未だ二三秒間ならずして枝は中より折れて同時に此に吊るされ懸りたる乞食僧は翻然と墮の中に落下せり若し他人をして斯る高さより落下せしめちば直にソコに死せるならむ去れども渠は些しの傷をも負はず頭上に響く銃聲をばアトにしつゝ身を起して早くも闇中に見えずなれり(大叛魁)

次に一種異風の小説家を

幸田露伴

氏とす。聞く氏が一家皆耶蘇教を奉ずるに氏獨り禪學に入り慶應義塾を出で、より東西旅行の間に禪味を養ひ以て其筆に企て及ぶべからざるの異彩を加へしめたりと。文章は簡にして潔しかも悲哀の極點喜怒の妙處に至りては畫が、すして言外に媚々たる餘韻の存するを覺ゆしむるに至る。亦他人の得て學ぶ

能はざる處なりかの人口に膾炙する『風流佛』の『彫像が動いたのやら、女が來たのやら、問は、拙なく語らば遅し、玄の又玄、摩訶不思議』の如きは一見何の意たるを解する能はざるに似たりといへども就いて讀むこと再三再四に及べば言ふべからざるの妙味おのづから生じ來るを感せん。右の

風流佛

のはか

露團々

一口劍

など最も有名なり。

人間元より變奇者目盲てから其昔拜んだ旭日の美しさを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし。珠運は立鳥の跡ふりむかず一里あるいた頃不圖思ひ出し二里あるいた

風流佛

頃珠運様と呼ぶ聲、ささしく其の人と後見れば何もなし三里あるいた頃もしへと袂取る様子、棧にお辰と見れば又人も居らず、四里あるき、五里六里行き、段々遠くなるに連れて迷ふ事多く、遂には其顔見たくなりて、寧歸ろうかと一ト足後へドッコイと一二町進む内むか〜と其聲閉度なつて身體の向を思ひすくると易る途端、道傍の石地蔵を見て奈良よ〜誤つたりと一町たらずあるく向より來る夫婦連の何事か面白相と語らひ行くに我もお辰と會話仕度なつて心なく一間許り戻りしを思なりと悟つて半町歩めば我しらず迷に三間もどり十足あるげば四足戻りて果は片足進みて片足戻る程のねかしさ自分ながら譯も分らず名物栗の強飯賣家の牀几に腰打掛てまづ〜と案じ始めけるが、箒木の山の中にも胸の中にも有無分明に定まらず此

國民の友の夏期附録

處言文一致家に頼みたし(風流佛)

常に世人の歡心を買ふに巧なるを以て穎敏なる『國民の友』は小説流行の氣運につれて、毎年夏期をトし、當時著名文學家の雄篇傑作を附録として出だす事を始め、又其論說に於て文學に對する意見を述べ、以て大に氣焰を吐けり、そも〜當時の小説界が此くの如き隆盛を來し、之をして世人着目の中心點たらしむるに至りしは畢竟小説家の力に因ること勿論なりといへども、この『國民の友』の如き彼の讀賣新聞の如き文學に熱心ある新聞雜誌が直接に間接に此機運を養成したるは疑ふべからざる事なりとす。

地方の小説流行

獨り東京に於て此くの如き繁昌を極めたるのみならず、此風施いて遠近諸方に及び、東京に於て發兌せる小説雜誌類の地方に賣れゆくものは一日より多きを加へ、大坂の如きは又東京に

小説發行の
団体

硯友社

模倣して珍奇なる古人の著作を出版し、東京にても或は文人おのゝ團體を爲して小説雜誌を發兌するものさへありき。硯友社は實に此時に於て組織せられ、其發行の雜誌を名づけて『文庫』といひ、其集會所を稱して『文壇の梁山泊』といへり。必しも百八人の文傑ありしに非ずといへども、其文學界を風靡せしむるに至りし勢には當時殆んど敵するもの無かりしが如し。彼等の多くは英書を學べり、其或者は獨乙書を學べり。従つて其著はすところ皆英獨の風を帯び、好んで常に「わらび」(お玉杓子)……(雨垂れ等の西洋流記號を用ひたり。而して又小説を交際社會に紹介するに此社の與かつて力ありしは人多く之を知らん。彼等の多くは交際家なり、彼等の多くの金満家なり。少なくとも金錢に吝ならざる人なりき。故に其作るところの書は体裁概ね華美に流れ、表紙の意匠と口繪の趣向とは寧ろ本文よりも工夫を凝すの

流行を爲し來れり。其文傑の主たるものを擧ぐれば、曰く紅葉山人曰く思案外史曰く漣山人曰く眉山人等の數人に過ぎず。概して言へば此社の文章皆婉麗と評すれば不可なかるべし。請ふ試みに之を列記して見ん。

尾崎紅葉

氏は好んで井原西鶴の作を読み、元祿流の小説を學ばんとするもの、如し實に硯友社中に於て實力上文學上共に第一等の位置にあるは氏なりしが、其文常に推敲の跡を句毎に留め、讀みゆくまゝに思はず、感服を呼ばしむるの妙少なからず。唯るの言語思想往々猥褻に流れ、兎角花柳社會の事のみ偏するの傾あるは、文學に清潔を尊ぶの上に於て寧ろ憾まざるを得ざるなり。其

色懺悔

三人妻

は傑作と稱せられ

伽羅枕

紅懷紙

紅鹿子

隣の女

初時雨

また名あり

伽羅枕

九月十六夜の月清みて磨きたるごとし。風爽かに渡りて
 今新結の髪に吹入り、湯わがりの温肌を拭へる餘は。來
 過し群立の梢に鳴るなり。踏分る小徑の八重葎には、月
 影を宿せる露のささらと亂れたるが指頭に冷つき、蟲
 の千方聲前後に音を争ふなご、秋節の骨髓といふ處を我
 一人が物にして開行のおもしろさ。一直線に見通しの木

立一簇曇れる中に、一點星の燈火の影を我宿と眺めて、
 一屈曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變り
 て今まで見ぬ遠景色書を展べたるごとし。酒一滴なしに
 これを見免す不風雅を我と無念がるばかり、世の氣樂な
 る人心になりて、幽憂も犯罪も忘れ果て、心意清しく辿
 行くに、我履む下駄の音より外は爰に塵界の響なきに、
 後に當りて山の腹に落葉を杖足に履む音、それか！と身
 構へて怪しと思ふ方に腫を定むれと物の影なし。怯心の
 迷ひと心を息めて二足三足行きしが、また物音するやう
 に聞えければ立留り、少時四邊を見廻はせと目に入るも
 のなし。されど胸騒ぎ出して月も蟲も遠里の景色もはや
 目には入らずなりて、直急ぎに足を早めて曲道の角、御
 用！と耳を貫ぬく聲に、骨散り肉飛ぶばかりなる不意の

驚駭、衝れしごとくたじくと二三尺身を退さり、體を構ふる間もなく、大石の轉けるがごとく凄じき地響して山より飛來る大勢、物をも言はせず前後を圍みて、眼前に鐵砲の銃口を揃へ、身動きもせば只一射にせんする有様なり。宗兵衛左右を轉眺はして突立てば、捕吏の一人聲高く、御用あるぞ、抵抗ふか。火遁陰形の術なくして、は此中を脱るべきやうなしとや、宗兵衛覺悟したりけむ、躬ら手を回はして繩を懸けたまへといへば、二人の捕吏銃を棄て、取附き難なく捕縛してけり。危き器具や所持せむと懐中を調べ、杖を探るに菓子袋出ければ、捕吏輩思ひも懸けずこれは何事と呆るるに、宗兵衛は見てはるく、と涙を流しぬ。この一滴に佐大夫は身を浮かすべし。(伽羅枕)

大學より出でたる一將に

石橋思案

氏あり氏の作は純然たる西洋思想にて之を装ふに和文体を以てす文章の妙と結構の奇と未だ紅葉氏に及ぶ能はずといへども一家團樂の幸福を寫し或は極めて緻密なる男女の情好を叙するに於て自ら一種獨得の妙あるを覺ゆ。

京鹿子

妹背貝

乙女心

等其佳什なるべし聞く氏近年腦病を患ひ専ら筆硯に従事する能はずと惜む天此秀才をして其文藻を伸べしめざるを。

幾箇となくたち並で居る石塔を青い苔が巧に古代模様を

乙女心

色迄ッて居ます。破れ果てむしりちらしたやうな藪垣に沿って石塔を覗いて居る卒塔婆は、モハヤ老惚れたか足のふみ度もなく右往左往に倒れかゝつてゐます。何時枝を離れたとも分らない落葉はふり積つて野犬の夜の床を敷いてゐます。かゝる荒れ果てた中に一際目立つし墓標もまだ生々しいし新佛。白張の提灯もまだ風に燃かれません。其前に膝まづいて合掌して居る女。乱れかゝつた後れ毛を掻き上げ様ども思はず。半面を僅かに覗いた處でも何か物思にやつれ果てた可憐の小女何を思ひ出したのか。一寸顔を上げ墓標を見ては泣き。口の内で何やら云ツては泣き。合掌しては泣く。此愛らしい女は泣くより外に仕事の無い様に……更に果てしがありません。漸く経つて泪の顔を上げました。

「ア、……もう、泣くまい、泣くまい……イクラ泣いたッておツか様が歸ッていらッしやる譯でもなし……こんなに妾いてはおツか様もで未練が残ッておいでなさる處へいらッしやる事が出来ない様な物だ……ア、もう泣くまい泣くまい……」

何か獨言を云ッて思はず顔を上げ墓標を見ると生憎泪の洪水が目縁の堰を突破ります（乙女心）

又硯友社の二俊才に

巖谷漣

氏あり氏は博く獨乙學を修めしがため其文學上にあらわしたる思想圓滿にして極めて深切に文章また之に適ひて痒き處に手の届くが如し。されば幼年小説を以て其得意と爲すもの故なきに非ず。實に無邪氣にして兒童の伴侶とするに趣味ある著作

は當時氏の右に出づるものあるまじきなり。幼年は又幼年相應の文學を有せざるべからず。而して人の思想を煉磨するに幼少の時代より大切なるは無し。従つて其師友たるべき文學は極めて圓滿なる思想もて包まるゝに、毅然として自ら持するの精神を以てせざるべからざるは論を待たざるべし。讀者眼を轉じて坊間流布するところの駄小説を見よ。多くは是れ淫を教へ情に陥るゝに非ざるはなし。此時に當り、獨り深切にも幼年子女の師友と爲つて健全幸福なる小説を著はし、以て世の善童善兒を希望ある世界に導かんとする。遼山人の志は、吾人豈雙手を舉げて之に左袒せざるを得んや。實よ此紛雜なる文壇の上に此くの如き篤志の士を得たるは、吾人の喜に堪へざるところなり。その

友禪染

こがね丸

殊に屈指の作として世に知らる。

友禪染

暫時して早川は野山を見返り、(君寫眞を出して見せたまへ)(もう破つてしまつた)(たゝ破つた……それでは仕方が無が……あれは皆一木の悪戯だぞ。——一木、此處で野山に謝罪りたまへ！)(謝罪る様な悪い事はせん)(イヤ左様は云はさん……君は元來何の爲に野山を二葉亭へ連れて行つたか)(只一所に酒を飲みに行つたばかりさ)(酒を飲みにばかりならそれで可いが……何の爲に桃吉を野山に押付けたか)(押付るとは？)(頼まれもせん寫眞なんぞ……而も餘計な裏書までして何の爲に野山に遣つたか)(それは申慮さ)(そ其の申慮が則ち友人を玩弄物にしたのちや無いか)(……)(今更云つたッて仕方が爲いが僕が初め

て三葉亭へ行つた頃も君はいろ／＼に構造説を以て僕を
 誑さうとした事がある。然し僕は信しなかつたからよかの
 たが野山の様な正直な男を捕へて……申戯にも程がある
 放蕩家の常で自分一人遊んで居ればよいに兎角善良
 の者まで誘拐して以て自分の功勞の様に思つて居るが。
 君等はその最も甚しいもので悪魔も大悪魔だ。君の様
 者があるから今日の青年社會が段々腐敗してしまふ。君
 の爲に其身を誤まつた者が大學中にも幾千あるか知れな
 い。實に吾輩が總長なら第一番に君を退學さしてしまふ。
 實に君は青年社會の悪魔だ。野山が……兎に角暫時な
 りとも身を持ち崩して自ら名譽を毀損したも皆君のなし
 た罪だから今謝罪れと云つたのだが、それが解らんか。
 (友禰染)

さなきだに病疲れし上に嬰兒を産み落せし事なれば今ま
 で張りのめし氣の一時に弛み出で、重き枕いよ／＼上ら
 ず明日をも知れぬ命となりしが臨終の際に兼てよも懸意
 せし裏の牧場に飼われたる牡丹といふ牡牛をばわが枕邊
 に乞ひよせ苦なき息を喘下吻きさて牡丹ぬし見ろなはす
 如き妾が容躰逆も在命る身にしあらねば臨終の際に只一
 事阿姐に頼み置き度き件あり妾が雄月丸ぬしはいぬる日
 猛虎金眸が爲に非業の最期を遂げしとは阿姐も知り給ふ
 處あるが彼時妾目前り雄が横死を見ながらに之を救けん
 どもせざりしは見下げ果てたる不貞の犬よと思ひし獸も
 ありつらんが元より犬の雌たる身のとひ其身は亡ぶと
 も雄が危急を救ふべきは云ふ迄もなき事にして義を知る
 獸の本分なれば妾とて心付かぬにはあらねど彼時命を惜

みしは妻が常ならぬ身なればなり。若し妻も彼處に出でて虎と争ひたらんには、雄と共に殺されてん。さる時は誰か仇をば討つべきぞ。結局は親子三匹まで命を捨るに異ならずば、是真に似て真にあらす。眞の犬死とは此の事なり。斯くど心に思ひしかば、恐ひ難き處を恐ひ、堪へ難きを漸く堪えて見在雄を殺せしが、此も偏へに胎の兒を産み落したる其上に、も仇を討たせんと思へばなり。さるに妻不幸にして、云ひ甲斐なきも病に打ち臥し、絶に絶ゆるなん玉の緒を、辛く繋ぎて漸く、今此兒は産み落せしが、之を養育むと叶はず。折角頼みし仇討ちも仇になりなん。口惜しき推量なして給はらば、何卒此兒を阿姐の兒となし、阿姐が乳もて育てあげ、他れもし一匹前の雄犬となりなば、其時ころは妻が今の此言葉をば傳へ給ひて、妻が爲には雄の仇、他が爲には父の仇なる彼

の金眸めを打ち取るやう、力に成て給はれかし。頼みと云ふ此件のみ頼む。ト云ふ聲も次第に細る。冬の虫草葉の露のいと脆き命は、犬も同じことなり。(こかね九)

此外硯友社には川上眉山、江見水蔭等の諸氏ありて共に短篇小説に妙を得たり。

余は硯友社の事を詳述せんがために、叙事の秩序を越えて、少しく後の時代に來れり。こゝに再び立ち歸りて、篁村南翠兩氏に書き續ぐべき異色の小説家を紹介する事を勉めんとす。

宮崎三昧

氏は亦南翠氏流の小説家なり。其思想は西洋風の流を汲ひこと多からずといへども、亦一種の体を爲せり。文章の輕妙なるは、篁村氏に及ばず。趣向の宏大なるは、南翠氏に及ばずといへども、人物、時場所の配置の圓満なる事に至つては、二氏の上に出づるも

のあり其作

桂姫

塙園右衛門

塙園右衛門

の如きは最も圓滿なるものゝ例とすべし。智慧の夕鐘に追立られ豆腐店を立出て、酒氣沸々と進る撥鬢の天類を、編笠に深く匿し、徐々と三條河原に来て見れば、時雨は風に拂はれて冬の月老女の面を粧ひ、川波凛烈として凄しく、我呑し酒や醒ると覺ゆるに、つはても鼻られたる首は噤寒からんに、片時も早く取卸してくれべき、と長き橋の上をのさりくと彼方此方へ往つ戻りの様子を窺がへと、まだ宵なればや番の者共月夜に無用の篝火を焚て、居睡らぬ證據には高聲に語り合ひ居ける一人當千の我塙園右衛門、這奴ばら風情に心を置く

にはあらねども、人の知ぬ間に悄悄と盗みてこそ手際なれ、ドタバタ番兵を投飛して無器用なる猫が膳棚の鼠を捕るやうな真似が面白かるべきや、今暫らく氣永に此夜を更して、と一先づこゝを立去り、東岸の小松原を上り下りに、小謠を二つ三つ、聲は鈍たれど節の細なり、

川瀬の千鳥の聲下腹に響いて飲し酒名残をどいめざるに、塙園右衛門微吟をどいめて、大略よき時刻、徐々と鼻毛抜の途に赴むかんと、霜や置くらん、編笠の袴の妻るを拂ひて着直し、寒しく、自在にあるならば今一酔、どいふたところが最愛の瓢殿は腰にかけ、最早談合敵になるべうもあし、又六殿の御住居も近き邊に御座あらず、

まゝよく、と吐きながら三條へ立戻り、橋の袂より月光に磧を透して窺がへば、篝火も燃て番人も番小屋の内に入り故國に残せし妻子の夢を見ると覺し、團右衛門點頭で、さればこそ我測りしに違はざりけれ戀入嗚な御待詫、ドリヤ御見に来るらうか、と往來人はなし、犬も吠す、中々足音をも盗まず、磧をのさくくと歩みて梟首場のはどりへ近づかんとすれば、怪しや竹柵より一人取付て乗隙んとす、怪ともせされを團右衛門自から眼を睜り、日頃の大音に何者と云んとせしが、刹那の思慮、我も怪物なるに心づき、急に開掛たる口を閉れば、彼方も人氣に顧み見て、ちと驚ける様子ありけり、(塙團右衛門)大和新聞の社主にして純然たる古風小説家と稱せられしは條野採菊

とりかへば

氏なり其紙上に續載せる勸懲的の小説は大に世人に愛讀せられ之あるがために其新聞の賣れし程なりと聞く嘗て『新小説』にあらはれしとりかへばやは頗る評判ありしもの、一つなり。主人詞林は玄關より身りながら出迎に出たる夫人浪子に向ひ直復羽根はベコ、三味線を弾て居升ね、ハイと言たるのみ抄々敷は回答もせされと詞林も玄關先なれば敢ては答めずやがて自己が居間へ來り衣服を着替ながら詞「コレお浪些羽根に小言を被仰い、學校から歸つても縁に復讀なぞいふ事もせず間がな透がなベコ、三味線ばかり弾せて置のは世間体も宜敷ない女の子を躡るの女親の義務であり升モウ三味線を止めさせて本でも御浚せな

さい溷みなたの御國と違つて東京では女の子はペンと駄
 チヤンと駄言ないじやア世間交際が出来やア致しません
 町職人と駄茶屋小屋と駄の交際なら何様三味線の巧拙を
 論ずる場合がないとも言ンがナンノ貴顯紳士の交際なら
 何様三味線が彈ませんと言つた所で少しも耻る事はない
 夫と反對に婦人交際會で探題の歌を詠むと駄茶でも點る
 といふ時分に吾儕は一向歌の心得はございません茶も存
 じません活花も出来ません其替り三味線なら三下りの騒
 ぎ唄都々一とつちりとん何ンでも遣り升と言つた所で貴夫
 人は何ンと評を下すと思ひなさる太だ耻入る理由ではな
 い駄(とりかへばや)
 こゝに又

山田美妙齋

文一致會

氏といへる小説界の若武者あり夙に言文一致を主張し言文一
 致會を設けて同志を糾合せり然れども其始にあたりては世人
 之を輕侮し殆んど度外と置きたりしが氏の言文一致体にて書
 がき出だせる小説の二たび世に出づるや其名聲は俄に四方に
 反響し前に冷遇せられし言文一致体は漸く衆人の注目するこ
 ころたらんとす殊に氏の評判を世間に傳へしは『國民の友』の夏
 期附録に掲げたる

胡蝶

と稱する短篇小説にして之に裸美人の書を挟みしより大に世
 論の囂々を來し作者と畫工とは一時殆んど攻撃の中心に立つ
 に至れり氏は又『國民の友』の紙上に於て韻文論を唱へ世人の耳
 目を惹かしめしが其自ら韻文に巧なりしは氏が初年に出だせ
 る

裸美人の書

韻文論

少年姿

を始として雑誌に著作にあらはれたる諸作之を證して餘あり。氏は又佛國の小説を好み中んづくエミール・ゾラ氏の小説を學びしかば、是より寫實派の名を得しと云ふ。殊に氏が得意とするの天然の景を畫かくにありて、其慘怛たる夜色の如き、凄凉たる曉色の如き、筆に従つて鼻叫び露下るを覺ゆる如し。是れ或は其言文一致体の遠く通常文体に優れるところなるか。

然れども氏が寫實に傾くの弊として往々猥蕪に流るゝあるは、切に吾人が氏のために文學界のために惜むところあり。其「都の花」に出だしたる

花車

この子

いちご姫

寫實派の名を得

は傑作の評高かりしといへども亦此缺點を免かれざりしこそ残念なれ、「明治文庫」を讀みたる人は必ず知らん。其「巻第一」として歓迎すべき文章は

戸隠山紀行

にある事を請ふ左の一章を見よ。

いつか起されて見ればあゝ戸隠大明神！東の嶺の端しらしらと晁めいて、朝霧の薄紗が朝日山の額を包み、風しづかに、空玉子色正に好天氣の瑞はあらはれた。朝まだ四時、既に柴田氏に訪はれた。顔を洗つたか、洗はぬかは全く夢中、單衣にくくりつけた高袴脚半と足袋とで足をしめてをとして前夜用意した日和下駄を穿つた打扮は登山に似合はぬ打扮と人は轉げて笑ふばかり。生來山越は靴で無ければ下駄、其外は不得手な私、よしや黒鐵の岩角

戸隠紀行

でも踏み碎いて進まうものをと氣ばかりは半ばは抜けて山へ馳せた。柴田氏は單衣の着流しに脚半草鞋がけ、福武氏も單衣に高袴の脚半草鞋がけ、何も身輕な打扮であつた。金剛杖にも象る蝙蝠つきたて用意整つていざと計りに出立した。長野町の人家まだ起きず買ひ立ての檜齒音高く響いて而も朝開の風もろとも涼しさう。往生寺山に差掛かる内爪先は次第に上つて其谷を経た頃は最早一起一伏すこしも定まらぬ時となつた、此處を何と聞けば其處に聳ゆるのが大峯山との事であつた。この大峯山は有名な松茸山で、如何さま見上げた處松といふ木の外には土ばかり。山はさらめいた土で松には適しさう。之を右左に送り迎へての一里ばかりはまことに唯の山、是と言ふ興もなければ是といふ不興もなく、同行三人無

駄口を木だまに響かせて罪もない途傍の甘艸又は釣鐘草の花をつまんでむしるばかり。果ては高笑ひに驚いて飛び立つ雲雀が二つ三つ。願りみれば長野にあつて見上げた朝日山やまだ今まで高いと思つた大峯山も山途の常、次第に低くなり果てて終には記標に見ぬた絶頂の松が地平線に嚙まれて行く體。夜は充分に明け離れて山の端を隈取る旭日の色もほんのり紅く、此日の天氣いよいよ頼しくなつた。(戸隠山紀行)

恍として身は紀行中の人と爲りしを覺えん。惚として心は畫幅中の人と化せしを感せん。亦多く得がたきの文なるべし。氏は彼小説の筆を揮ひ此紀行の文を畫がくの傍ら大を大に日本大辞典の編纂に用ひ其功半は成れるを告ぐ。實に勉強家といふべし。氏亦近來大に劇を論じ劇を作る。その早稻田文學に「梨園

露國小説の輸入

の内秘』を寄せ、博文館より『村上義光錦旗風』を出だし、人は人の知るところなり。英獨二派の占領たりし小説界は、亦異様の方角よりして新思想を輸入せり。何ぞや、人間社會の出來事を哲學的に觀察する露國小説の入り來りし事これのみ、中んづくトルストイ伯およびツルゲーネフ氏の小説は其模範として最初に紹介せられしが如し。蓋し

二葉亭四迷

氏は其紹介者の一人ありき、『都の花』に出でたる

浮雲

野末の菊

『國民の友』に出でたる

流轉

等は其傑作なりとす。文章簡易にして、言文一致体なりしは左の作に就きても見るべし。

浮雲

「え、も、ぢれッたい！勝手にするがい、！」

其儘母親は奥坐舖へ還つて仕舞ツた。

これで坐舖へ還る綱も截れた。求めて截ッて置きな

がら今更惜しいやうな、ぢれッたいやうな、をかした顔

をして暫く待ッてゐてみても、誰も呼びに來ても呉れな

い。それに奥坐舖では想像のない者共が打揃ッて、嘶

すやら、笑ふやら、肝癢紛れにお勢は色鉛筆を執ッて、

まだ眞新しなすうゐんどの文典の表紙をこしく擦り

初めた。不運なはすうゐんどの文典！

表紙が大方眞青になつたころ、ふと襟側に足音、耳を

聳て、お勢ははッど狼狽へた、手ばしこく文典を開け

て、倒しまになつてゐるとも心附かたで、びつたり眼で喰込
んだ、どんと先刻から書見してゐたやうな面相をして。
すらりと障子が開く。文典を凝視めたまゝで、お勢は
少し震へた。遠慮氣もなく、無造作に入つて来た者は
云はでと知れた昇。華美な、軽い調子で、遁げたね、
好男子が来たと思つて。
と云はして置いて、お勢は漸く重さうな首を矯け世に
も落着いた聲でさもにべなく、
あの失禮ですが、まだ明日の支度をしませんから……

〔浮雲〕

報知社の

原抱一庵

氏も亦露國文學の熱心家なりしと云ふ氏の作にして世に出で

たるもの多くは短篇のみ否らずんば反譯のみ氏が大に名を成
すは蓋し他日に在るべし。
當時の文學は小説をもて之を代表せしめし事余はしばしば既
に言へり其作者に富み其著作に乏しからざりしは讀み來つて
讀者また遺す處なからん余はもとより小説を以て文學を代表
せしむる事を満足するものなりとは言はず然れども我國教育
の根底を社會に占むること日猶淺く實用の學問すら未だ完全
の域に達する能はずして人は日々の糊口に忙しきと共に社
會は又其時々急務にのみ逐はれつゝありし當時にあつて吾
人の精神上より湧出する眞の文學は恰も砂上に畫がける文字
の如く暫しは社會の表面に出沒するあるも時に急潮怒濤の來
るに遇へば立どころに洗ひ去らるゝは亦免かれがたきところ
今余が小説を以て文學の全般を推すの止むを得ざる所以なり

新舊二派

而して當時の謂はゆる文學家すなはち小説家の多くは、年なほ壯にして徒に西洋主義に心酔し新思想を入れん事をのみ勉めたるが如く、否らすんば春秋既に富み偏に舊思想保守主義に傾ける人のみよく其兩時代にわたりて深く研究したりし文學家は當時に稀なりしなり。故に當時の文學家は社會の思想の幼稚なるに従ひ、一時はよく世人の耳目を聳動せしめたりといへども、社會小數の有識者をして悉く満足せしむることは或は能はざりしならん。有識者の或者は固より文學界に是等新現象の起れるを喜ばざるに非ざりしといへども、其廣く社會一般にもてはやさるゝが故に、其少壯なる思想を以て社會を浮華輕薄に導かん事を憂ひしなり。又文學界の規律全く破れて支離滅裂に趣かん事を恐れしなり。

社會の文學家を待するや、是までは歡迎の心のみを以てせしと

批評といふ事起る

いへども、文學界の形勢その繁昌を極むると共に、日に非なるを見出だす事亦少なからざるが故に、社會の批評眼は今や漸く開かれ來れり。或は公平に深切に作者のために批評せしも有らん。或は嫉妬心よりして同臭輩を陥れんがために之を試みたるも有らん。兎に角嚴酷なる批評は到るところに起りたり。凡そ溜り水は腐敗の速なると共に、文學の如き精神上の事業も外界の刺撃一たび絶ゆる時は、萎靡不振の状況に陥るあるは東西古今の通則なり。當時の我文學界も此かる患に沈まんとして而して敵より朋友より有益なる批評を受くるに至る。吾人は大に文學のために賀せざるを得ざるなり。

批評といふ事一たび起りて日に其隆盛を見るに至るや、恰も國會開けて政界の魑魅魍魎が其電燈に照破せらるゝ如く、文學界の門地閼闕は打破せられたり。玉石混合せる文學界は嚴酷なる

批評家出づ

分析を受けたり。是れ豈文學進歩の一段階として大書せざらんと欲するも得んや。批評家は常に匿名を用ふるが故に。小説家も左様なれど讀賣新聞以下二三の文學に熱心なる新聞紙上には。此頃より種々異様な名目を以て數多の批評家あらはれたり。余は一々之を記さず。恐月正太夫の二氏は蓋し其最たるものなりき。

石橋忍月

氏は獨乙派文學家にして批評家を以て自任せり其批評は甚だ皮肉的にして嚴酷なる代りに公平なりとの評あり。氏は亦嘗に批評家たるのみならず其批評眼を基礎として構造せる一種不拔の文學に對する理想あることは疑なし。氏の自ら之を健全なるものと信じ。進んで之を社會に教へん事を力めしが如く。遂に其摸範小説なる

露子姫

露子姫

は世に出でたり。此書果して文學家一般を満足せしめしや否を知らずといへども。平凡なる一般社會には餘り歡迎せられざりしと聞く。

踏み返されるのも厭はず芽を出す土筆の愛らしさ續く日和にさそはれて早咲する董菜の仇氣なさ見渡せば遙か土堤の梢には花も大分咲き初めたと見みて淺き霞を鑿鑿かせてゐる。其處は此處？向島に程遠からぬ小村井！かゝる樂しき境に若菜を摘みつゝ逍遙してゐるのは女連の一隊しかも十七八の淑女振袖の姫御前未婚者か？無論！美人か？無論！かゝる長空なる空氣の裡にかゝる綺麗な活動の愛嬌が包まれてゐる其美しさ如何なる畫家も如何なる詩人もとても其實狀を寫し出すとは出來まい某と

言る好事家の慈母愛兒を懐く所を以つて人間界の最も優
 美なる者だと鹿瓜らしく謂つたとか、それは妻子を持つて
 ゐる経験家の眼より見たところ、妻もなく子もなき水の出
 花の若殿達に言はしむれば、彌生の野邊に處女の遊べる所
 を以つて最も優美なるものと謂ん、敷中に就て一際衆人の
 目に立つ淑女は先づ後より見るときはスラリと瘦方な姿
 で襟脚長く雪を欺く程白き細きしなやかな首がスーッと
 直立したる鹽梅最早それのみで美貌の程思やられる前に
 廻れば即ち卵形の顔純白八分と微紅二分を調合した寒梅
 色小いさな可愛もさ口元を結んだ所に満身を吊格が集つ
 てゐる然し其笑ふ時にも亦此口元の邊に満身の愛嬌が現
 はれてゐるなせ？なせ？なせ？アの花恥かしき朱唇の内に瓢
 實を並べたやうな齒が隠見するんだもの、アノ程よく豊な

る双頬に鳴門を蓄へてゐるんだもの、生髪は富士額眉は柳
 葉目は？言ふにや及ぶ是れこそは造化が最も意匠を凝ら
 して仕上げたもの試みに他物を假り來つて譬んに恰も濁
 りにそまぬ蓮の浮葉の露の玉に清き月影の宿れるが如し
 ！年頃の乙女子此淑女に逢ひ此目此口此眉此顔を見ると
 さは思はず見とれて思はず振返る況して男子に於ては—
 又況して未結婚の男子に於ては—（露子姫）

次に

正直正太夫

氏は悉月氏に比して稍や公平を缺くの評ありしといへどもよ
 く作者の心情を穿ち巧に裡面の觀察を施し極めて奇警なる筆
 を以て手當り次第に大小小説家の作を批評せり其あまりに觀
 察の裡面にわたるが故に氏の『斬魔劍』は到るところに敵を邀へ

しが其劍光が文學界の暗黒を破りしの功は確かに之あり氏が亦小説作者として一種異様の妙腕を有せしは人の知るところ余が平凡の眼を以て見れば氏の批評家として忍月氏に譲るだけ夫だけ小説家として寧ろ忍月氏に優れる如し殊に其名ある作を

油地獄

とす。

るれに又た過日の手紙とんな容子かとお袋が氣に懸け旁々用事もあるので自身出て来たとの話振りに金を持って来られたとが明らかになり知られて首を垂れて聽て居た貞之進は其時冷たい汗が腕下を傳はるともに稍安堵し手紙に書たまゝの事をぼつ／＼と句切つて繰返すを爾か／＼と庄右衛門は點頭ながら四邊を看廻はしいや厚しいや細か

油地獄

いこれも讀んだのかと取散らしある大字典の金字に目を留め是れは高價な物であらうと云れたに附込んで書籍の代に追れますと貞之進は紙の吸口で火鉢の縁を摩つて居たが三度の食に望みはないとだから宿を新しく取るよりもほんの二三日此家で済めば結局勝手ちやがど其儘父に泊込まれて氣が氣でなく親も大事金も大事暫し夜歩きも出來ずに居る假の神妙が眞どの念ひを倍々募らせて今ころは小歌は何うして居るか濱田の御前か黒の羽織か正可此貞之進を忘れもしまいと例に依て寐てからの枕の上にも疑ひと打消しどが旗鼓相下らず闘つて明日の天氣はと問れた父の詞に縁結びて御在ますかと答へて最う夢か寐附の早い男ぢやと笑はれやつと四日間の父の逗留を三五年程にちやみくらしこれ私で私が難用もと出立際にのこし

往れた金の思つたより多額なのに勇氣が出て父を上野迄送つた其日の暮れるをも待たず請取つただけを悉皆懐ろにして出やうとする所を目賀田さん一寸と呼留めたは秋元の女房直歸りますと既に下駄箱へ手を掛けたをまあお待なさい話がありますと強て引留られて餘儀なく貞之進は呼れる方へ戻つて行つた(油地獄)

吾人をして一見して小説なるか將た記録なるかを疑はしむるものは。

黒岩涙香

氏の反譯なり文章平易なるを以て評判高く殊に新聞紙上に筆を執りて寧ろ中等以下の智識を有する人々に廣く了解するを得せしむるは恐らく氏の文章の右に出づるもの無からん又氏の文章は精審なるが故に錯雜なる英國小説を譯するには最も

探偵小説出

適當せるが如く此得意の筆を尋常一様の小説に弄せずして奇想天外より落つる探偵小説に用ひたるは人の既に知るところなり元來探偵小説は其妙尋常の小説の如くに或は愛を寫し或は悲を寫す等人情の極微を畫がき出だすに非ずして或事件に就き寧ろ禍福轉變の急劇なる状態を畫がき出だすにあり故に局面の變化極めて多く讀むものをして或は恐れ或は驚き一たび之を緋けば手巻を置く能はざるに至らしむ但し固より文學上の高尚なる趣味を有するに非ざるが故に他の優美なる小説とは同日に談すべからずといへども或時代には世人却つて他のものよりも之を歓迎する事あるは事實なり氏は始め尋常小説家と群を同じうせしが其獨得なる探偵眼の遂に氏を驅つて探偵小説の巨擘たらしめたり氏の反譯にかゝるもの頗る多し中にも

鐵假面
非小説
大金塊
死美人

非小説

の類最も名あり。晝間より降居たる雨も日暮れに至りて風と變じ夜の更るに從ひて益々吹荒むのみなれば忙がしき倫敦の町人も十時頃より戸を鎖し眞夜半近くに及びて硝子窓打つ風音の哮るのみにて市街は無人の郷に似たり獨り此暴風に恐れず薄暗き街燈の光を便りてゼラルド街を歩み行く一人は是なん當時勉強を以て聞えたる毎夕新聞の探訪者安野田露人と云ふ若紳士にして明早朝よりの編輯に供へん爲め夜半の種を探らんとの心なるべし安野田は風に向ひ俯

向て歩むのみなりしが忽ちに椿事の匂ひを嗅附たりと云ふ如くに顔を上げて立留りオヤ助けて呉れと叫ぶ聲が聞ぬた様だぞ。ハテな何處だらう夫ども風の聲かな外の探訪者は此様な夜には種がないと云ひ家に籠つて居るけれど此様も時こそ却つて珍事があるテ爾思つて出掛て来て好い事をした。咄く聲の終らぬうち又も何れよりか「人殺し」と呼立の聲風に交りて飛來たる扱こそ愈々大珍事だ風の爲め何の家から來るか少しも見當が附かぬ。ハテな「徒らに前後左右を見廻すうち我立つ所より五十歩ばかり先手に當り軒の下に角燈の散りと見ゆるは必定此邊を受持てる巡查なるべし。ハテな巡查に此聲が聞ぬのか。シテ見ると矢張り風かな斯く思ひて直に角燈の方に走行かんとするに三度目に聞ゆるは確かに風に非ずして人の聲なり

誰か来て助けて呉れ、今度は畧見當も分りたり右側か左側かは知されど何でも巡査と我身との間なる家の二階若くは三階より来る者にて巡査は風の上にいる故我身ほどには聞えぬなるべし去れど巡査も三度目の聲には驚きしと見え安野田が其の方を差し行くと齊しく彼れも此方を差し奔り來り道の中程にて行合たり。巡今叫んだのは貴方ではありませぬ安何でも此邊の家の中です私しも怪んで走つて來たのです。巡何の家さう安何の家でせう同じ言葉の受答へ兩個が途方に呉る、折しも安野田の前巡査の背後なる二軒目の家の内より忽然と戸を突放し矢の如く飛び出る一人宛も人を殺せし曲者の逃るが如く逸足出して風の吹く方へ走り去る(非小説)

或は批評家の手を借り或は文學家の研究により我國の小説は

年を追ひ月を追うて精巧に趣けり先に獨乙より歸り來れる

森鷗外

新聲社

氏が同志の助を得て「新聲社」と稱する文學の一團體を起し或は「國民の友」紙上に或は「柵草紙」の上に其文學に關する著作と意見とを公にしたりしは亦當時の文學に對する一の刺撃にして世人の注意を多く獨乙文學に惹きたるも此時にありき氏の著作は慨して言へば悲惨の情を寫すに巧にして筆鋒また極めて精緻なり獨乙風の思想に和文体の衣を着せたるものと評して可ならん其作は悉く纏められて

水泡集

に在り中にも

舞姫

至極評判宜しかりき

明治二十一年の冬、來にけり表街の人道にてこそ沙をも捲け、鋪をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の處は見もめれど表てのみは一面に氷りて朝に戸を開けば飢ゑ凍むし雀の落ちて死にたるも哀れなり室を温め竈に火を焚きつけても壁の石に徹し衣の綿を穿つ北歐羅巴の寒さはなかつたに堪へがたか、エリスは二三日前の夜、舞臺にて卒倒せしとして人に扶けられて歸り來つ、それより心地悪しとて休みしが食ふと嘔吐を惡阻といふものならんと始めて心づきしは母なりき——嗚呼、さらぬだに覺束なきは我身の行末なるに若し眞なりせばいかんせまし

今朝は日曜なれば家も在れど心は樂しからずエリスは床に臥すはどにはあらぬと小さき鐵爐の畔に椅子さし寄せ

て言葉寡し、この時戸口に入の聲して程なく庖厨にありしエリスが母は郵便の書狀を持て來て余にわたしぬ、見れば見覚えある相澤が手なるに郵便切手は普魯西のものにて消印には伯林とあり訝かきながら披きて讀めば頼みの事にて預め知らずに由なかりしが昨夜こゝに着せられし天方大臣に跟着てわれも來たり伯の汝を見まはしどのたまふに疾く來よ、汝が名譽を恢復するも此時にあるべきぞ心のみ急かれて用事をのみいひ遣るとなり讀み畢りて茫然たる面もちを見てエリスは故郷よりのふみなりや、悪しき便にてはよも——彼の例の新聞社の報酬に關する書狀と思ひしならん否、心にな掛けそ、れん身も名を知る相澤が大臣と俱にこゝに來てわれを呼ぶなり急ぐといへば今よりこそ「舞姫」

文界の變化

新聲社の文學界に於けるかの硯友社の如く赫々の名を成さし
りし代りに其浮華に流るゝ事また無かりしかば文學家一般よ
りは重々見られしなり其社の作として公になりたるものは『國
民の友』五十八號の夏期附録に出でたる『おもかげ』を以て最とす
獨詩反譯の『笛の音』平家物語脱化の『鬼界島』皆秀逸として人口
に膾炙するは誰も耳にせし處ならん
此頃二十一二年より文學界の有様は大に變化せり小説は下火
に爲れり是まで威名赫々たりし小説家は寂として復た聲なか
らんとす然れども余は之を以て必しも小説の衰微と見做すも
のにあらざる寧ろ他日の準備時代として考へんとするものなり
此將に落莫たらんとする小説界に立つて稍や世人の注目を招
きたるは

ちぬの浦浪六

櫻葉小説

氏の謂はゆる櫻葉小説なりき氏は義俠浪人を寫すに巧よして
文章亦よく之にかなへり其語句の間に於て或は推敲を経ざる
ものゝ如き瑕瑾の往々なきに非ざといへども一氣呵成他の能
く企て及ばざるものあり

井筒女之助

三日月

奴の小萬

鬼奴

深見笠

等今なほ世に愛讀せらるゝを見る

夜いたく更けて星の影暗く雨氣を含んで土手の松が枝を
鳴らす風凄く人影に吠ゆる犬の聲さへ聞へずなりぬ折し
も牛込の方より堀端傳ひに見ゆる提打の光り水に映じて

三日月

上下二つの團火伴なふて歩むがごとくや、市谷見付に近づかんとする時、おはれ提灯おちてパツと燃ゆるに閃く稲妻何者ッ」と叫ぶ一聲、エ、オ、と掛くる切聲續ひて、タと走る數人の足音傳通院の初夜つく鐘も遠音に響きて一入の慘を添へぬ

土手三番町の白須が邸へ宙を飛んで駆け戻つたる若黨一人ク、リ門を叩く間もあらばこそ叫びながら突き入りて曲者御隠居の大事、市ヶ谷の堀端危い聲聞付けて俄かに騒ぐ家内の者より、長屋の戸口蹴放ちて躍り出たる大の男、脇差提げて玄關前を斜めに走りざま、御家來衆續ひたく「呼聲はあとに残りながらぬしの身は早や門外に跳ね出たり

(三日月)

嗚呼一盛一衰は人生の常、今や小説界また此理に漏れずして文

學は一波毎に且の進み且の退かんとす、請ふ目を刮いで第三期の至るを待て、

其三 戯曲脚本

西洋文學一たび趣味を我國に傳へ、小説界の門將に開かれんとするに當つてや、書生沙翁を講ずると同時に我在學の院本また參考品として案頭に積まるゝに至れり、此に於て『新評戯曲十種』(依田學海、小永井小舟等諸氏の嫩軍記、忠臣講釋等を評せしもの)、『文法捷徑』(那珂通高氏の忠臣講釋手習鑑、曲輪日記、千兩幟等を評せしもの)出で、又慶應義塾出版社の『大和文範』數十曲の淨瑠璃を活字にして出版せしもの等の書續々と十三四年の頭を以て出つ、甲は漢文流の批評にして乙は白文を活文に組みかへたるに過ぎざれども、以て當時世人の嗜好を代表し、且つ又將來世人

新評戯曲十種

文法捷徑

歌舞伎新報

の嗜好を誘導せしものたるや疑ふべからず然れども是は單に文章として院本を見たるのみ名文として戯曲を評せしのみ未だ芝居といふ事の觀念は是等の書の直接に語る處ならざりしが此頃より『歌舞伎新報』出で、幾分か役者と見物とを結び附け更に演劇と文學とを親密ならしめんとするものゝ如し是れ一には院本を以て西洋文學の上位を占めしむるの刺撃に出で二には政界の雲行や、定まりて天下文學を樂しまんとするの時に際したるが爲めあらざや坪内逍遙氏の

該撒奇談

此頃には現はれたる偶然に非ざるなり請ふ其數行を示さん

それはそうと予は何處まで讀まして置たるかトいひつゝ、書籍をくりひらき舞ヲ、この處まで讀だりしがトかたへの椅子を引寄せて、よりかゝりつゝ、書籍をば讀まんとさせ

該撒奇談

る折しもあれ燈火にはかに薄ぐらく、いづこともなく朦朧と今ハ世になき獅威若が怨の魂か恐ろしき異形の怪物煙の如くあらはれ出で、恨めしげに椅子のはどりへ近づけば舞妻多須ハツと心付き舞ハテ怪しや、今まで光明かなりし燈火の暗く成たるは〇ヤ、其處を参りしは何物なるぞフム心得難き奇怪の現象、これは心の迷なるか〇ヤア其方は何物なるぞ神か人か幻か但しは悪魔の化現なるか此舞妻多須をして覺えずも、悚然として戰栗せしむる其方はニリヤ、イ何物あるぞ〇何物なるか返答いたせ(靈)われは汝の爲の悪魔なるは(舞)シテ其悪魔が何故に此所には來りしぞ(靈)比利比の原野にて再び汝に對面せんことをバ告ん其爲に(舞)よし、然らば彼の地に於て又も汝に相逢ふべし(靈)いかにも比利比の原野にて對面なさんと、いひさ

して、ありしすがたの其儘に消へて跡なくなりけり(舞念には及ばぬ、比利比にて○ヤ、もはや跡なく消うせしか、今、漸く我心も我に歸れる心地して、もはや悪魔邪神と雖も共に語るを恐れざるに

西洋院本の我淨瑠璃体に譯せられしは實に之を始とす。之に續いて出でたるは英王チャールズの傳を譯せる『蕪東風英軍記』にてや有りけらし。譯者は戸田欽堂氏なりき。

演劇改良論

演藝矯風會

世の嗜好既に此くの如し、今や文學家は進んで演劇改良論を唱へ、役者また熱心に其學説を聞き、其新作を容れんとするの、時節となりぬ。此に於て演藝矯風會起り、此會にて脚本を出だす事と爲る。其作者に撰ばれしは櫻庭篁村須藤南翠の二小説家、篁村氏は之を朝日新聞に載せ、南翠氏は之を改進新聞に掲げ、以て世の喝采を博せんとせり。歌舞伎座の起れるは是等の改良熱に驅ら

二大作者

れてなりき。然れども二十年頃一時の火の消えたる如く、矯風會も泣寐入と爲りたるが、二十三年に至りて再び燃え立ち、更に演藝協會と改名して大に新作を行はんとす。此間に篁村南翠兩氏の筆を揮ひたれども、其作遂行はれずして、最後に宮崎三昧氏の手に爲れるもの僅に行はるゝを得たり。此時にわたり歌舞伎座局面の外に立つて盛に筆を脚本に執る大家二人あり、一は舊體を守つて名を老練に得たる

川竹默阿彌前には新七と稱し其水と號す

氏にして二は大平記流の評判高き

依田學海

氏なりとす。前者は實地を以て主とせしが故に、或は文學家の歡心を買ふ能はずといへども、芝居となりて舞臺にあらはるゝ時は其妙實に凡手の及ばざる處多し。其名作と稱せられしは

霜夜鐘十字辻占

戀暗鶉飼篝火

を始めとして數十種の多さに上れり。後者の作は文章的にして寧ろ小説に近く、其忠臣義士の心事を穿つに於ては、殆んど間然する處なしといへども、劇通は曰へり、役割道具立臺詞等の點に至りて未だ素人たるを免かれずと。或は然らん、是れ氏が經歷の然らしむる處なるべし。作中の有名あるものは

吉野拾遺名家譽

文覺上人勸進帳

等なり例によりて文覺上人中の數行を示さん。

師長資賢卿が横笛は紅葉と名付けし靈笛にて、其昔し住吉大明神強て御望みありしと云ふ世にも稀なる名笛にて、其音も殊に麗しく。

文覺上人

公隆又正賢卿の笙の音は、鳳凰の音を聞くに等しとて、鳳管と名付し名笛殊に兩卿が秘術を盡し、調べられたる妙音は、心耳を澄す不思議の妙手。

資賢コハ分に過ぎたる其れ詞笛は元より重器あれども、最も未熟の調べをば、斯くお賞しに預るは、時に取ての身の面目先づ何よりは師長公が琵琶の秘術は人も知る、我が朝にての是れ妙手。

盛定一年早魃の其折に、宣旨を蒙り師長公日吉大宮の神前にて、琵琶の秘曲を盡されしより、神明感應ましつて、正賢天より神雨降りしより、万民雨の大臣と御名を呼びしと聞き及ぶ、實に有難き秘曲の妙音中々以て我々が及ぶ處に候はず。

資時夫のみならず諸卿達何れを何れと分け難き、其道々の

妙を盡されお調べありし秘曲の程、感心致して候なり。
師 未熟の業も、叙感有て今一曲と御所望あれば、各々秘曲
を盡されヨ。

公 委細

五人心得て候。

文 珍らしからぬ管絃かな、機嫌もなき御遊かな。

師 君前間違へ來たりしは、何者なるゾ。

重 案内もなく、不敵にも御庭前へ進み寄る。正しく狂氣よ

疑ひなし。イザ門外へ引出し呉れん。

文 イ、ヤ決して狂氣にあらず。我は高雄のほとりに住む。

文 覺と云へる沙門、貧道無縁の身たりと云へど、高雄山神護

寺を修造建立なし。佛法を住持し、王法を祈誓し、衆生を利益

せんと云ふの大願あり。況んや大慈悲を旨とし、玉ふ十善万

乗の君として、なごか容易く御奉加は、聞し召し入れられざ
るへき。今謹んで大願の趣意、叙聞に達すべし。各々夫にて聽

聞あれ

此紛亂の時に乗じて、赤手遂に歌舞伎座を乗つ取りしは、昔日新
聞界の大將軍と聞ゆし。

福地櫻痴(源一郎氏の號)

居士これなり。其趣向の大なる事、或は學海翁に譲る處なきに
非ずといへども、居士が眞の劇通たり。院本作者たるの點よりし
ていへば、十分黒人的のものたるは、世人の一般に許すところな
り。其最も名あるものを

春日局

平野次郎

關原譽凱歌

日蓮記

平野次郎

等なりとす。左の『平野次郎』敷行を翫味せば思半に過ぎん。

長澤番人ども西側其外を見廻るであらう

番人畏つて御座ります。ト番人は金棒を引き長澤の先に立

ちて西側の方へゆく是より竹本太夫が床の淨瑠璃に

なつて

淨「痛ましや平野次郎國臣は憂とまざる升木屋のひと

やの内うちに囚とられて心こころはすむや須磨琴すまのこに思おもひを述のる一

節せつの節せつも唄うた歌かも哀あれなり

（ト此淨瑠璃の切きにて牢内らうないにて一弦琴いちげんを彈ひて左の

唄うた歌かを唄うたふ）

唄「ひとやの内うちの日長ひながさは千ちとせの秋あきの心地こころちせり此この

殊ことなる神かみの代よか更さらに命いのちも延のびぬへし素もとより獄舎ごくやに

住すむ身みは詫わしと云いふも愚おろかかり悲かなしと云いふも餘あまり

り樂あそしと云いふて止とままじ（ト唄うたひ畢まりて）

平野ハッ我われながら女め々々しき述の懐われ心こころを澄すして尊そん攘じやうの手て

段だんの工く夫ふういたさうか

淨「丈夫ぢゆうぶの魂たまひどつかと座ざし思おもひを疑うし居ゐたりける無な

暫しばやな國臣こくしんが妻つまの妹いもおひさ女むすめは姉あねが形見かたみの雄吉ゆうきちを

背せに負おひつ、唯ただ一人ひとり恐おそひ寄よるころ健氣けんきなれ

お久ひさ今いま聞きえし一節いちせつは兄上あにがみの御聲ごこゑム、扱あは彼所あそこが……其それで

あるよナア、ハテ何なにして御知ごしせ申まさうかオ、夫おとこよ思おも

ひを述のぶる子守唄こもりうた（ト雄吉ゆうきちをゆすぶりながら）

唄「坊ぼくやはよい子こじや、お泣なきやるなア坊ぼくやの御ごつかち

やん、とこへ往いたアお父ちちさんの身みの上うへ苦くにやんで

エ返からぬ旅たびにお立たちやつたア坊ぼくやのおとちやんは、

どこへ居る大かた知らずに居やうらうら。

(ト唄ひながら牢の邊に悉び寄れば平野は吳器口より顔を出して)

平野ハテナ今唄ひしは聞覚えある聲なるが (ト見廻せば)

お久は平野を見て

お久兄さま

櫻痴居士に繼いで起つ青年才士は抑も誰ぞ山田美妙齋氏亦近來脚本を著はすに志ありと聞く。

其四 新体詩唱歌

小説と共に勃興し來りしもの猶あり曰く詩歌の改良論とす其論と爲つて發せしものハ洋學者より國學者より種々の論據を以て種々の目的を以て一時に湧き立ちしといへども或は模範

詩歌改良論

新体詩抄

と爲り或は参考と爲りて新体作例の先鞭を着けたるものは之を二途よりすと謂はざるべからず其一は歐米大家の詩歌を反譯し若くは是等より得來りたる趣味を反響せしめしものにて外山正一、山仙士と號す矢田部良吉尙今居士と號す井上哲次郎(巽軒居士と號す諸氏の『新体詩抄』十五年發刊)に於て技倆をあらはしたるもの之に屬し其二は西洋唱歌を小學校幼稚園に用ふるにあたり樂譜に合はせつゝ新作もしくは反譯せし歌曲にして文部省音樂取調掛にて公にせられし『小學唱歌集』十四年發刊之に屬す概言すれば前者は謂はゆるポエムを起さんとするものにて用語は通俗平易を主とし後者は謂はゆるソングの手にして語氣往々古調死格に傾けり是れ其大なる差別なり『新体詩抄』に曰く。

一里半なり一里半

並びて進む一里半

死地に乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をなすも分ならず
死ぬるの外はあらざらん

將は掛れの命下す
譯を糾すは分ならず
これ命これに従ひて
死地に乗り入る六百騎

〔外山氏譯〕

昔の人の是といひし
今日の眞はあすの偽
非理邪道とやなるならん
規律に由りて進化すと
睨と心に認めたる

事も今では非とぞなる
あすの教はあさつての
天地萬物一定の
學者は謂へば是を之れ
人は果してなかるらん

〔矢田部氏作〕

争ひ多き世の中に
なりてますく進むべし

此身を寄せて先鞭に
言なき隘となる勿れ

率かる、牛となる勿れ

〔井上氏作〕

小學唱歌集

『小學唱歌集』に曰く、

うつくしきわが子やいつこうつくしきわがかみの子は弓
とちて君のみささにいさみたちて別れゆきにけり。
又曰く、

かきながせる筆のあやにそめしむらさき世々あせずゆか
りの色ことばの花たぐひもあらじそのいさを。

以て氷炭其趣を異にせるを知るべし。然れども物の左に曲れ
るを矯めんとすれば先づ之を右に傾けざるべからず。新体詩派
の是より續出して通俗的の詩歌を興せるは外山以下諸氏の功
多きに居ると謂はざるべからず。而して優美流調以て吟すべく
以て歌ふべきものたらしめしは唱歌集の獨り拍子を取りしに

由らすんばあらざるなり。
此頃より小説は漸く盛に爲れり。小説家は日に月に數を増し來
れり。従つて新体詩を作り新唱歌を詠するの聲亦小説界中に響
き出でたり。

山田美妙齋

氏の『少女裁縫の歌』

霜 さえて 雕 とはく 飛ぶ。
大 の こる 川 を も わたる。
い さ や 冬、むし も 機
織り は て、しづか に ねふる。
春 の さぬ われ も 縫ひ せん。
添乳 する 母 を たより に
はのぐらさ 光り に たどる。

進め、針、あだ に な 折れそ。
身 を つくし、着どめの 時 の
えりどめに なれよ、あゝ 針！

また

嗟峨の屋おむろ

氏の西詩反譯中

岩うち流すテレク川
悪徒のチエチエンが岸を匍ひ
お腰の劍といで居る
けれども其方の父様は
手だれの武夫軍人
お眠やれ可愛子うとくくと
ねんねんようおころりよう

などの作以て其一班を推すに足るべし。

宮崎湖處子

氏といふ人あり英國の詩宗ウターツウターの詩篇を愛讀して
屢バ之を反譯せり『少年園』に載せたる

兄弟ありや汝達は

いくたりなりや童女と、

問へば『皆にて七人』と

いふかしげにぞ我を見し。

『いづこにありや我に告げよ。』

と云へば『我等七人の

三人は都に家を持ち

二人は海に浮びたり。

の如き其一なり亦豈英詩の思想を傳播せしむるに於て力なし

白菊の歌
和歌改良論

と謂はんや。

拙作の新体
詩

是より先き落合直文氏は『白菊の歌』を著はし萩野由之氏は『和歌
改良論』を著はし以て舊体を脱し新思想に入らんとするの傾り
國文家中にも萌し初めたりしかばかの洋學家中の熱心者と遙
に相聲援しつつ長篇詩歌の進歩を謀るものゝ如し建樹不肖に
して諸氏の驥尾にも附く能はずといへども亦此間にあたりて
新体詩唱歌の拙作を屢ば公にせし事ありしは讀者或は知るも
あらん十九年に『書生唱歌』を出だし二十年には『詩人の春』を出だ
し二十一年に『いさり火』を出だし又此年より年々に『明治唱歌』
を出だしたり。

國文家の新
唱歌

人氣の向ふところ世運の趣くところ謂はゆる新体詩なるもの
と學校用唱歌と隆盛に到れり國文家よりは高崎正風福羽美辭
黒川真頼本居豊頼佐藤誠實中村秋香落合直文小中村義象關根

正直平田盛胤等の諸氏出で、其作に従事し、旗野櫻坪氏は「無韻非歌論」を主張し、山田美妙齋氏亦熱心に韻文論を唱へしかば、洋學家また頻に之を作ら試むるもの多きに至りぬ。然れども之を他の小説に比して其發達を論ずる時は、未だ幼稚にして殆んど紙綴の中在るを免かれざらんとす。嗚呼其眞の發達と隆盛とを見るの望は第三期に屬せざるを得ざるなり。

其五 雜誌及著書

新休時といひ脚本といひ多少小説に動かされて起り、幾分か小説家の手を借りて生長せしは讀者既に知れり。小説が文學の代表者として爛々たる光彩を當時に放ちたるより生じ來りし影響は管これのみならず、雜誌に著述に種々の點に於てあらはれたるかの「都の花」新小説「やまと錦」あしわけ舟「文庫」我樂多

小説雜誌

國民の友

柵草紙

文庫「江戸紫」新作十二番「新著百種」「小説群芳」等の如き小説に關する刊行物が雨後の茸のやうに續々世に出でしは固より其主たるものなりといへども、概ね唯だ文學上の製産物を示すに止まりて、之を研究する事に深く意を留めたるものは未だあらざりき。此時にあたり従來の政事雜誌にして文學の爲めに力を盡したるものあり、又新に文學研究の爲めに設けられたる雜誌あり、「國民の友」は其前者に屬し、「柵草紙」は其後者に屬す。元來「國民の友」は趣味多き雜誌にして機を見る事早く、時好に投ずること頗る巧なりしが、今や文學の一變すべき氣運を豫知して、其ために一驥の力を盡し以て世人を進路に導くの一燈光たらしめしは、兎に角民友社の功多しと謂はざるを得ず。其夏期附録の殊に當代名家の作を集めたるものなるが故に、極めて廣く愛讀せられ、今猶せられつゝあり。「柵草紙」は隅外氏の下に述べたる如く、